江戸名所圖會

三縁山増上寺 廣度院と號す關東浄家の總本寺十八檀林の冠首にして盛大の佛域たり百一代 後小松院の御願にして開山ハ大蓮社酉誉上人中興ハ普光観智國師なり

十八檀林ハ武總常野等に存在を阿弥陀佛六八本願の中より十八を以て最勝とするに因て 御當家 御称号松平氏の松や撰を麁墨し其字や能雪霜にあふされも又君子の操ありてまたと太夫の封を受く其字や木公は從ふ細にわかつときハ十八公なり依て是を弥陀の十八願にかくてあひ精舎十八區を建て永く擬檀林として多く英才を育しく法運興發の謀を設け御子孫永く安からんとすハ霜雪の後ち松樹の繁茂するがごとくの盛慮に從ひ 瀲家の御代と浄家の白旗流義により万代かくまでも守護しますへきるを表しあふありとも以上浄宗護國篇新著聞集等の意を採摘す

本堂本尊阿彌陀如来 惠心僧都の作中尊座像御長四尺なりとなり或云佛工運慶の作ありと

額 三縁山 廓山上人真蹟 上人ハ當寺第十三世なり甲州の産にしてく高坂彈正の子なりといへり

御經藏 本堂の前左の方擁の中にあり或人云こゝに納る所の一代藏經ハ宋板にして其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりしを後彦坂九兵衛尉 台命を奉し當山にうつそとなり菊岡沾凉云昔ハ方丈にありしを寛永九年照誉上人了学大和尚経藏を創立しうるとなり今ハ官造に列せ

開山堂 同所左にならふ當寺開山以下累世大僧正の肖像および靈牌等を置きたり

開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス鎮西正統第八世の祖とす貞治五年七月十日千葉系図貞治二年六月三日とあり北総の千葉に生る父ハ千葉陸奥守氏胤母ハ新田氏なり童名を徳寿丸と云一書ニ徳千代とあり加冠して胤明と称す出離の志深く釈典を慕ふ九歳ニして遂ニ同国千葉寺ニ入て落飾し初ハ密教を学ひ後同公ニ投帰して浄宗ニ入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺ニ住せらる今の増上寺是なり江戸名勝志ニ云増上寺の旧地ハ糀町一丁目越後やしきと云辺なりとあり此寺始ハ真言瑜伽の道場なりしが竟ニ光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗風を轉しく浄業の精舎とす永享十二年庚申七月十八日寂ス歳七十五臘六十七東国高僧伝ニ応永二十四年ニ寂す寿詳ならすとあり中興開山勅賜普光観智国師諱ハ存応字ハ慈昌貞蓮社源誉上人と号を平山左衛門尉季重の後裔なり伝灯系図ニ云姓ハ由木又ハ鈴吾投尉源利重云々天文十三年護国篇十年ニ作る武州由木ニ生る始衣を片山の宝臺寺ニ摳ひ十八歳感誉

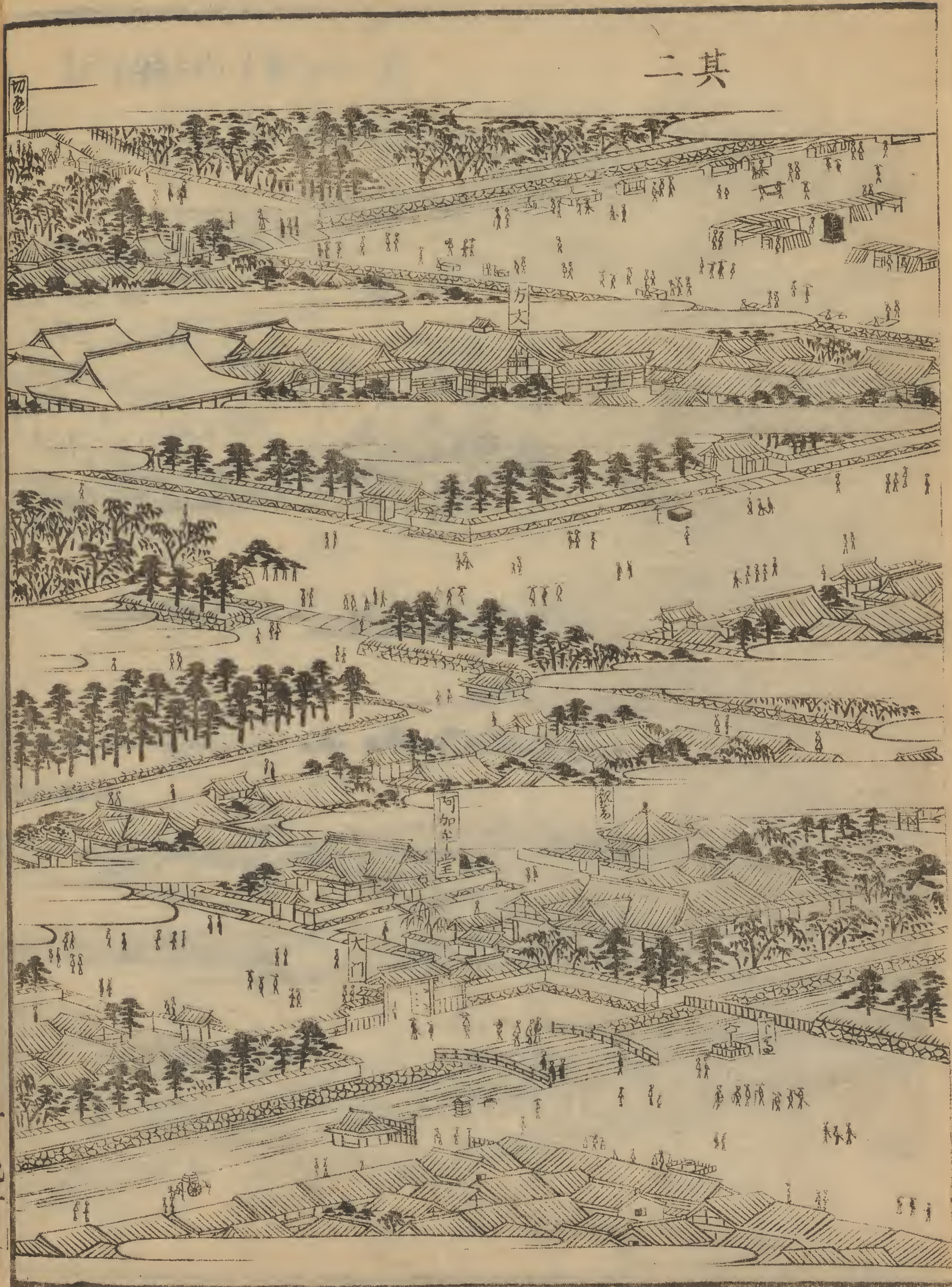
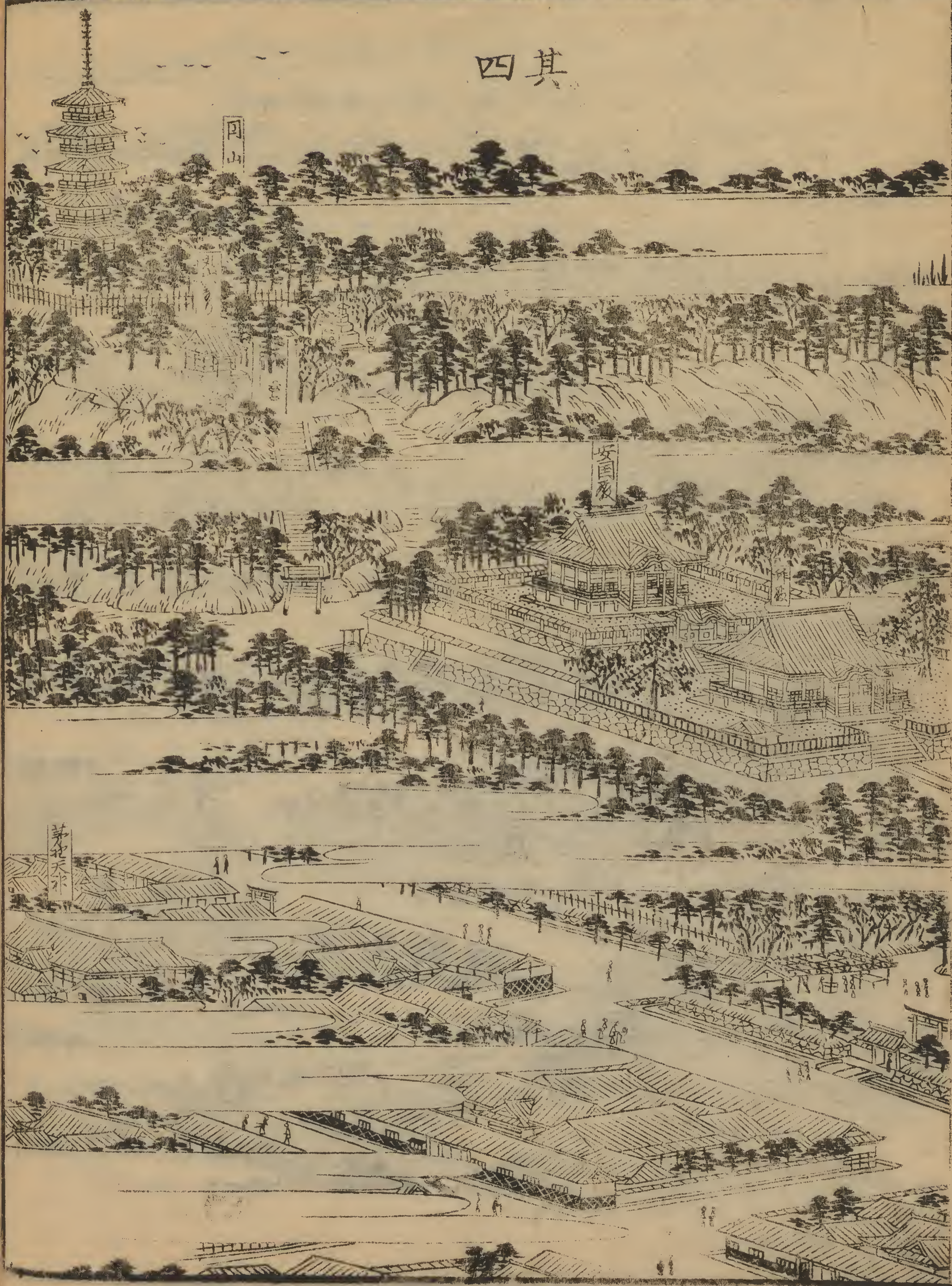
其二

切通

方丈

山門

大門

其三

上人に帰して登壇受戒す天資聰悟にして顯密の教を究む上人没後上總に到て長傳寺を創し大に法席を開く人呼て教海の義龍蓮苑の祥鳳となす天正十三年雲誉上人の會下にあり同十七年八月璽書を傳兼して増上寺第十二世となる當寺第十二世なり同十八年天下安靖なるに逮んで大に
大神君の眷顧をうけ屢営中に請せられて法要を聴受しまひ崇信他に異なり竟に増上寺を修営せしめ植福の地となしたまへり又
後陽成帝師を宮内に徴して道を問ひ盛に浄教の深旨を陳ぶ　叡感ありて褒章を加へ新に宸翰を染たまひ特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十九日なり元和六年師微恙をかんじ嗣君

増上寺山内

芙蓉洲弁天社

池中ノ蓮

大将軍親ら臨むて忝くも疾を問せ玉ふ十一月二日諸徒に遺誡し辭世の偈を書しく曰く佛話提撕心頭塵末後一句但稱佛と筆を抛て端座合掌し佛号を唱へて化を世壽七十有七僧臘六十護國篇世壽八十とあり門葉甡〻として学徒流に浴を撰述する所論義決擇集阿弥陀経直譚等大に世に行はる以上浄土高僧傳浄宗護國篇傳燈系図等に出つ

大銅鐘 本堂の右の方にあり鐘の厚さ一尺余口の渡り五尺八寸その高さ一丈程あり銘曰新鑄洪鐘掛三縁山増上寺之楼二十六世森誉上人歴天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源祇寛鑄工椎名伊豫吉寛云〻其聲洪大にして遠く百里に聞ゆ一撞の間の響ずいぶん長くして行人一里を歴るとて諺に一里鐘と称せ此ほか後ひく當國熊谷の辺に聞ゆありしかとも江戸より十六里ノ隔つ又安房上総へも聞ゆといへり

熊野三所権現祠 同所にあり則當寺の鎮守

黒本尊堂 本堂の後蓮池より奥の方にあり本尊阿弥陀如来の像ハ恵心僧都の作なり御長二尺六寸相向圓備かしこく生身の佛體に向ふかぢし世人呼んで黒本尊と称せり多くの星霜を歴て金泥ことごとく變して黒色となる故に此称ありしとも或ハ源九郎義経の持念なりとも故に九郎判官と云の意なりとも始め参州桑子の明眼寺にありしを某の邑の調をもつて寺へ献す元禄の比靈像をぬすみ常に念持佛としたまひしが竟に當寺に返し給ふとぞ元禄八年増上寺にて御修営の時桂昌一位尼公重ねて佛龕新に御宝帳玉扉構飾精巧を極むと以上浄宗護國篇に載る毎歳正月十六日四月八日同十七日諸人にゆるして参詣をゆるさる

三門 元和九年癸亥御建立或云八年なりと楼上に釈迦文珠普賢の十六阿羅漢等の木像を置正月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日等に登楼をゆるさる

安國殿 本堂構の外南の方にあり四月十七日ハ御祭礼にて参拝を許さる参詣する人多し来由ハ其憚あるをもつて是を略す御別當を安立院と号す

五層塔 同所御佛殿の地蒼林の中にあり酒井雅樂侯の建立なりといふ

涅槃石 同所にあり御影物師吉岡豊前作なりといへり羅漢石とも号く

曼荼羅石 同所にあり後藤祐乗得乗の作といふ来迎石とも名つく

鷹門 同所にあり

極樂橋 同所前の溝に架せる

宗廟 御當家御代〻の御靈屋なり當寺院中より御別當を務む

御常念佛堂 涅槃門の方にあり恵照律院と号す浄土律にして當山の別院なり横蓮社縦誉心岩上人開基す同巻赤羽心光院の条下に詳なり當院に上人真筆の涅槃像の版木あり有信の輩に授与す他の図に異なり

性壽庵 方丈の後の方にあり尾州清須城主松平薩摩守忠吉の靈牌を置故に俗に薩摩堂とよべり側に小笠原監物を始としく殉死

五人の石塔あり柳の井といふも同所南の坂通りにある名泉なり

飯倉天満宮 天神谷にあり當山の地主神なり昔飯倉の神明も此地にあり宝松院別當をかねて社地に梅樹を多く栽て二月の頃一時の荘観なり

茅野天満宮 同所南の方松林院にあり神像は菅神の直作とそ

圓光東漸大師舊跡 山下谷明定院にあり是も當山の別院なり明定院前大僧正定月大和尚明和七年に建立せらる六間四面の堂にして戒壇造なり

圓座松 同所にあり

圓山 同所にあり

辯財天祠 赤羽門の内蓮池の中島にあり本尊は智證大師の作なり右大将頼朝卿鎌倉の法花堂に安置ありし星霜を経て後観智國師感得ありて當寺宝庫に納めありしを貞享二年生誉靈玄上人此所に一宇を建て一山の鎮守とあがめらる宝珠院別當なり中島を芙蓉洲と号く此所門より外は赤羽にして品川への街道なり

子聖権現社 山下谷にあり清林院別當たり

産千代稲荷 觀智院にあり昔は普光院と号すもとより當寺は八合蓮社明誉檀通上人の旧跡なりといへとも

阿加牟堂 常念佛の道場なり東の大門の通り常照院にあり

大門 東に向ふ當山の總門なり外に下馬札を建らる

御成門 北の方馬場に相對す此所にも下馬札あり

涅槃門 切通の上にあり惠照院に涅槃像あるゆゑなるべし

柵門 山下谷より赤羽へ出る所なり赤羽門ともいふべし

當寺旧古は貝塚の地にありて光明寺と號せし真言瑜伽の密場なりしく後小松院の御願に依て草創ありし古刹なりしを至徳二年酉誉上人移て住せらるの後竟に了誉上人(傳通院三ケ月上人のことなり)の徳化に歸し寺を改めて三縁山増上寺と號し宗風を轉して浄刹とれ(事跡合考に出せる三縁山歴代系譜に云く當寺草創之地者貝塚今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云々日比谷より芝へ移されしは慶長三年戊戌八月なり武徳編年集成に慶長三年戊戌誌る天正十八年辛卯平川口へ移されし増上寺を芝の地にうつさるとあり平川口は比々谷や古へ地を接を相混していふなり)

東照大神君天正十八年始て江戸の大城に入らせたまふとき州民鼓腹し老幼相携て道路に拝迎し奉る幸に寺門の前路を通御あるによりて觀智國師も是を拝せんとし出て寺前にあるを(是則比々谷の地にありてのことなり)時に師の道貌雄毅尋常ならざるを見そなはしたまひ其名を問せられ乃寺に入て憩たまひ其後當寺を以て植福の地となしたまひ永く師檀の御契約ありて御崇敬あつく屢師を営中に請せられ法要を聴受なしたまひ待遇殊にし是を親王に比せられ師としく衆輿して殿階に昇ることを得せしむ以て永式とす今に至て歴代の住持咸この栄をうく時に寺境隘狭ゆゑしくありしを

大城に接近を（是乃比ゝ谷にありしの事）依て今の地に移されし大に資財を喜捨し殿堂房室に至るまで悉く営建したまひ最宏壮の大梵刹となれる（事跡合考に慶長十年乙巳本堂回廊等の造営ありて大伽藍となると云ふ）於是浄家の宗教一時に勃興し念佛の聲天下に洋々たり（浄宗護國篇に出づ慶長十年）一朝門前の老翁師に謁して云く今夜祥夢を感じ師微笑して云く你其夢を鬻げ吾買んとて青銅二十疋を與ふ既にして翁云く増上寺軒端の松木繁りたる師曰く吉徴なり慎て人に語ることなかれと果して翌日伽藍營復の命ありて竟に宏構鉅材天下に壮観となりし由浄土高僧傳に出でたり

抑當山は關東浄刹の冠首にして龍象の聚る所實に霊山會上布金紺園にも比すべし數百戸の学寮は畳々として軒端を轆る支院は三十餘宇甍々として甍を連ぬる三千餘の大衆は常にここに集る中にも能化は一代の法蔵を胸間に貯へ所化は十二の教文を眼裡に晒せり三心即一の窓の前には五念四修の月を弄び事理倶頓の林の中には実報受用の花を詠ず佛閣の荘麗なる七宝荘厳の浄土も又此を

去る事遠からずとぞ思ひまゐらする

御忌参（正月廿五日）涅槃會（二月十五日）誕生會（四月八日）開山忌（七月十八日に修行す一山惣出仕まで近在の末寺より出て大法會を修す）

十夜法會（十月六日より同十五日迄修行す）

飯倉神明宮

同東の方神明町にあり（江戸名所記等に日比谷神明と称す今俗間之を神明と称するあり）其舊地は増上寺境内飯倉天神の社地なりと或云赤羽の南に小山神明宮の地なりとも社司は西東氏（名所記に社古當社の神職に宣ありしかあり）相州足柄郡より齊藤氏なる人を招き神主とすと云ふ別當は金剛院と号す其餘社家巫女等あり

神鳳抄云　武蔵國飯倉御廚　當時四貫文

同書又曰　飯倉御廚長日　御幣五十丁

東鑑曰　壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉寄附両村於二所大神宮去永暦元年二月御出京之刻感霊夢之後當宮事御信仰異他社然者平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之時若者縱雖為凶賊之在所不拘觸事之由於祠宮無左右不可亂入神明御鎮座御之旨度々所被仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御廚被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分

飯倉神明宮
世に芝の神明宮といふ
本社
拝殿
春日
天王
大こく
茶や
吹矢

安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進状 下畧
寄進 伊勢皇太神宮御厨壹處
在武蔵國飯倉
右志者奉爲 朝家安穏成就私願殊抽忠丹
寄進状如件
壽永三年五月三日
正四位下前右兵衛佐源朝臣

按るに當社を飯倉神明宮と称しまつるハ旧飯倉の地にわたらせしかれは也猶
もとありし其地ハ芝三縁山今の飯倉天満宮の社辺なり飯倉と云ハ往古
此地に伊勢太神宮の御厨ありし所ゆへ地名を飯倉と唱へ又伊勢の
神を齋まつるなるへし猶飯倉の糸下に拝なり又東鑑に同年正月
武蔵國大河土の御厨を豊受太神宮の御領に寄附のよし載あれハ一國の
内にもところかしこにありしなるべし

社記云人皇六十六代一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座なし奉る其時神幣と大牙一枚此地に神
天降る又此地の童女に神託
ありく彼二種のしるしをわかりしるく此地に跡を
とゞめおハしますとなり依て當社を営るとぞ其後建久四年癸丑右大将
頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劒

九月十六日
飯倉神明宮祭礼
太好庵
神宮御祭禮
御門前
氏子中
御門前
氏子中
屋

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附ありて其頃繁昌の宮居たりしが遥に後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原の城主大森實頼を亡して後威を逞うせし頃是が為に神領を掠められるに依て宮社ハ霧に朽風に破れ奉祀の人もなく大に荒廃したりしを天正に至て四海昌平の御時忝くも台命によりて當社の廢れたるを興しあらい神領若干を附せられ又寛永十一年甲戌にいたり神殿を修造なしたまひしよりぞ社頭舊観に復す依て神燈の光りいよいよ赫くとして和光の月にあきらかへ利物の花ゆきさハ匂ひ深くして神威昔に倍せり

當社の祭例ハ九月十六日なり同し十一日より十二日まで至るのあひだ参詣群集を商ひ物多きが中にも藤の花を画きたる檜割篭におゐてハ土生姜殊に夥し故に世俗生姜市又生姜祭とも唱へり江戸名所に於ても臼杵木鉢新菓物多しとあれど今ハ題を鬻ります檜割篭を俗にちきと名つく又生姜を賣る事八丸之しきよりのつりゆく雲を趣をましす

宇田川橋　宇田川町の大通りを横切て流るゝ小溝に架せり

今ハ上に土を覆ふ故に橋の形を失ふを宇田或ハ宇多に作る小田原北條家の臣宇多川和泉守といへる人架せしと云傳ふ小田原記に大永四年上杉修理大夫朝興北條氏綱に責られ品川表にて戦を云条下に氏綱朝興を亡し首を實驗ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者とも中つけ普請役ところに淡沃をとあり東海道驛路鈴に長禄元年丁丑四月八日太田道灌江戸にうつる其後宇多川和泉守長清ハ品川の舘に住とあるを又元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に昔此所へ宇田といふ刀を墮したる故に此名ありといへれ證とするにたらす

日比谷稲荷祠　芝口三丁目西の裏通りにあり此所町市至りて狭し故に土人日蔭町と字す本山方北修驗寂靜院別當たり萬治の頃藍屋五兵衛といへる者託宣に依りて花洛藤森の稲荷を勧請なせしとそいへりし日比谷昔ハ比々谷に作る小田原北条家の所領役帳にも比々谷に作る此地を大胡宮内少輔所領の中に加ふ

烏森稲荷社　幸橋より二丁斗南の方酒井下野侯邸の北横通りにあり往古よりの鎮座といへとも年歴来由共に詳ならす元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に天慶年間藤原秀郷将門退治の時の勧請なりといへとも信としかたし又如何なる故ありしや當社の神宝に古き鰐口一口を納む表に元暦元甲辰年

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所ちゑしふ日比谷稲荷の条下に云く此宮地ハ借地なくありしか不断絶に及ふへき頃稲荷の神宮守に告て古来より此鎮地なりとて鮮明のしるしを与へられ宮守公へ訴へ此證によつて宮居つゝかなしとあれハ當社のことを誤てかくいへるにや或人云く明暦の回禄に奇瑞ありしゆへ其後社の辺除地と社司山田氏を柳営御連歌の御連衆とし別當ハ快長院となりしを号しく本山方の修驗なりも祭禮毎年二月初午に執行ひ幸橋御門に假屋を補理て神輿を移して参詣群集して賑へり

古河御所足利成氏願書一通當社に蔵す

稲荷六明神願書事
今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書
之状如件
享徳四年正月五日　左兵衛督源朝臣
成氏判

藪小路

藪小路　愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云同所民の裏門の傍に少しはかりの竹叢あるも故にしか名つくといへりされと其来由詳ならす傳説あれとも證とすへし慶長より寛永の頃に至り細川三斎侯此地に住せられしその庭中の藪を號くといへり

藪小路

櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流るゝ溝川をいふ名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑にして畔に櫻樹幾株ともなくありし其中を流るゝ故櫻川といひしとあり　下流ハ宇田川橋の方へ流れ又三縁山に傍ふて金杉の川へも落合へり

摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸に傍ひてあり新義の真言宗にして江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊薬師如来の霊像ハ弘法大師の作なりし慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に薬師佛の像を手刻せしめ件の霊佛をハ其胎中に籠なりといへり　毎月八日十二日ハ縁日にして参詣多し

愛宕山権現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同しといへど自ら別なり本地佛ハ勝軍地蔵尊にして行基大士の作なり永く火災を退けたまふの守護神なり楼門の金剛力士ハ

愛宕社（あたご）總門（そうもん）

其二

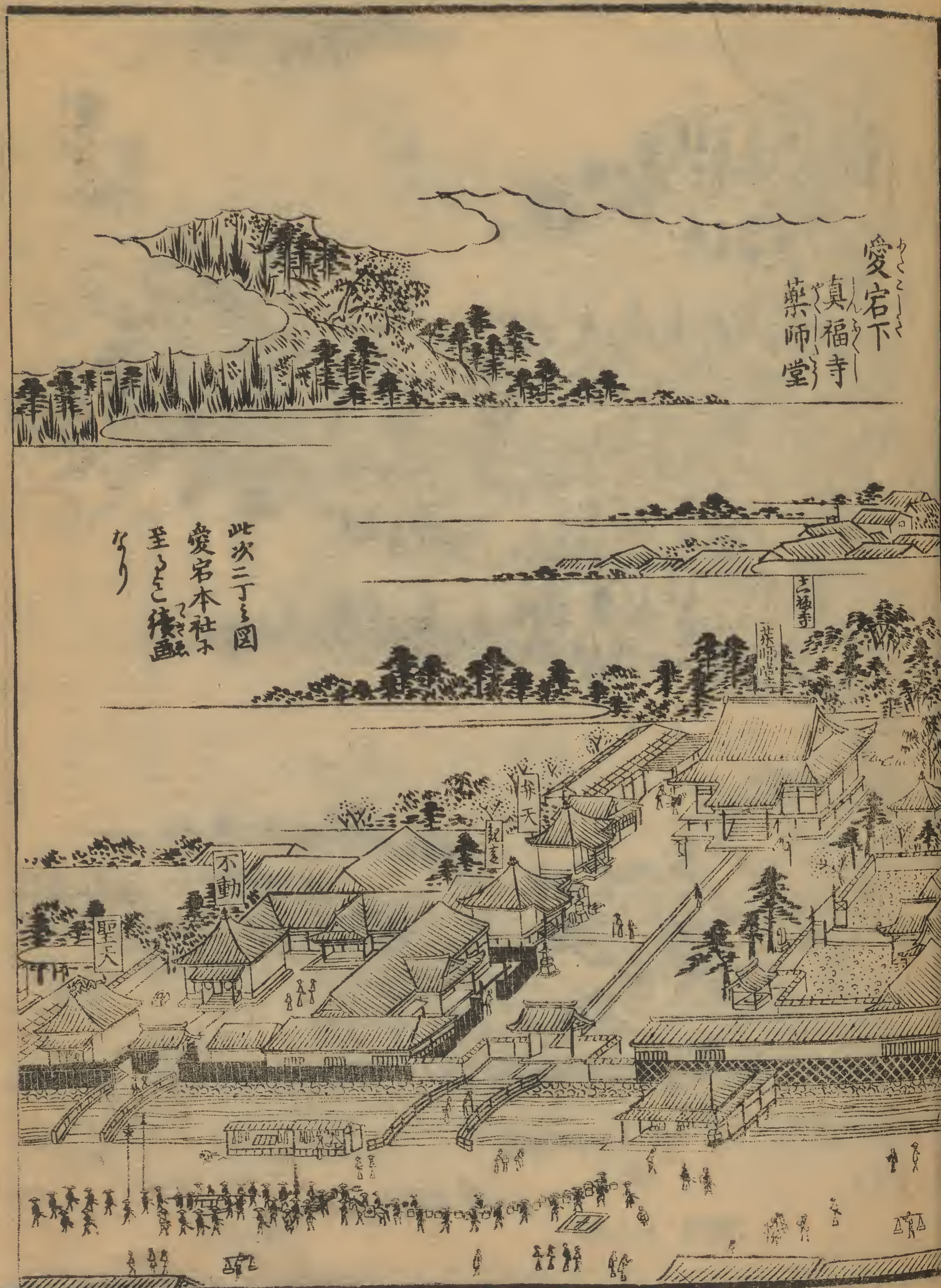
京洛移遷座武州簗擅
構閣陟山丘誰知幣帛
神封物却作沙門活命
謀

羅山子

男坂

女坂

別当

總門

其三
愛宕山権現
山上本社図
宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵬鯤忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公
服元喬

運慶の作同二階の軒に掲し愛宕山の三字ハ智積院権大僧正の筆なり 別當圓福教寺ハ石階の下にあり 新義の真言宗江戸の觸頭四箇寺の随一なり 開山ハ神證上人と號す二世俊賀上人といふ（四箇寺とハ湯島根生院本所弥勒寺當所眞福寺並に當寺をいふ）

（神證上人字を春音といひ後あらためて春香と号す下野の人にして姓ハ塩谷氏母ハ皆川氏なり元和五年 鈞命に依て金剛院に退居せらる天年を終ふ春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院満蔵院鏡照院壽桂院等をくハへて六院あり 俊賀上人字ハ圓精と号す野州西方邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神祠に祈りて誕す其始下妻の圓福寺に仕ふ然るに其頃下総結城の元寺上州松井田秀峯等一世の豪俊なりしく俊賀上人をあハせて新義の三傑と称せらる元和五年俊賀上人愛宕権現の別當に命ぜしれ共に圓福寺の号を以て一字を開かしめ給ひ永く大法幢を樹大法鼓を撃夏冬廃る事なし終に檀林職となる学徒業として雲の如く也て川の如く起る実に江城檀林の権輿なり）

縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信楽の辺に行化の時當社の本地将軍地蔵尊の像を彫刻しおひ後安部内親王に奉る（第四十六代 孝謙天皇の御事なり） 親王則彼地に宝祠を営まて是を安置まします（其旧跡を今も割柳と名つく） 然るに天正十年壬午の夏 台棋泉州を發しあひ大和路より宇治を経て江州信楽に入せ賜ふ此時多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舎らせられる頃あるし此像を献る（多羅尾家譜に云 左京進光俊初て多羅尾と号す其子常陸介綱知三好若江の三人衆といふ其子四郎兵衛光綱江州信楽を領す 云く多羅尾八四郎左衛門ハあるじ四郎兵衛光綱入道道賀の事なるべし） 其節同國磯尾村の沙門神證といふを供せられ此霊像を持して東國に赴かしむ 爾より御出陣毎に神證をして此勝軍地蔵尊を祈念せしめらる 遂に慶長八年癸卯の夏 台命によりて同庚子年石川六郎左衛門尉當山を開き假に堂宇を造建しあひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立ある元和三年丁巳同國豊島郡王子邑に於て百石の社領を附しおかる

（惣鹿子といへる冊子に此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といへる人の宅地なりしを沙門春音慶長庚子の御出陣に勝軍の法を修せし地ゆへ後ち征伐ありしより當社を御建立ありしと云又同書に慶長八年九月廿四日貴賤の参詣を許さるとあり江戸名勝志同名所記にも寛永に始山城の愛宕を遠州鳴子坂に勧請し夫より駿州宇津屋に移し後又爰に安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といへる人の勧請なり）

愛宕山円福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
三日に修行ス女坂の上愛宕やといへる
茗肆のあるし旧例にてこれを勤む
この日寺主を始として支院のものも
出頭して其次第にあり座を僭け
強飯を飯ま半に至る頃此毘沙門
の使と称する者麻上下を着し
長き太刀を佩雷槌を差添又
大なる飯かひを杖に突初春の
飾り物にて兜を造り是を冠る
相随ふもの三人共に本殿より
男坂を下り円福寺
に入て此席に至り
俎机にあかりて行
飯かひをもて三度
魚板をつきならし
して曰
まうりきたる
者ハ毘沙門天の
御使院家役者
ましや寺中の
面々長屋の
所化ども勝手の
諸役人まて
至る迄
新茶ハ
九杯古
茶ハ七杯
御飲あれ
杓子を以て
時其一臈なる
もの答て曰
毘沙門の使ハ
あるといひて
本坊へ
立帰る

とあり此説圓福寺に云傳ふるすなく證とするにたらず按に此山の地主神ハ毘沙門天なりとて今も於社の相殿に安置を毎歳正月三日毘沙門の禮と称する舊祀の式あり其式画上不詳あり按に當寺開山俊賀師ハ始野州にあり野州辺ではよくくその強飯の式ありて世に示謂日光の古式に准ゑて當寺に行ひけるもの恐らくハ後賀上人より始るなりしん歟

抑當山ハ懸岸壁立して空を凌ぎ六十八級の石階ハ畳々として雲を挿むがごとく鬱然たり山頂ハ松柏鬱茂し夏日といへどもあがりに登れバ涼風凛々として炎暑をわするる見落せバ三條九陌の万戸千門ハ甍をつらね所せく海水ハ渺焉とひらけて千里の風光を貯へ尤美景の地なり毎月廿四日ハ縁日と称して参詣多くとりわけ六月廿四日ハ千日参と号けて貴賤の群参稲麻の如し 縁日ごとに植木の市立て四時花木をうる事壮観なり

萬年山青松寺 同南に隣る曹洞派の禅刹なり江戸三箇寺の一員たり本尊ハ釋迦如来開山を雲岡俊徳大和尚といふ文明年間太田左衛門佐持資草創を初め貝塚の地にありしを後 或云天正又慶長にも 此地に遷さる 故に今も俗に貝塚青松寺と称せり

一に青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く 南向亭云く青松甲斐と云人草創を其旧跡ハ糀町の貝塚 當時玉虫八左衛門とのへる屋鋪にありとぞ 彼墓を甲斐塚と云と 菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりといへり 又當寺に太田道灌の塚ありといへり 詳ならず

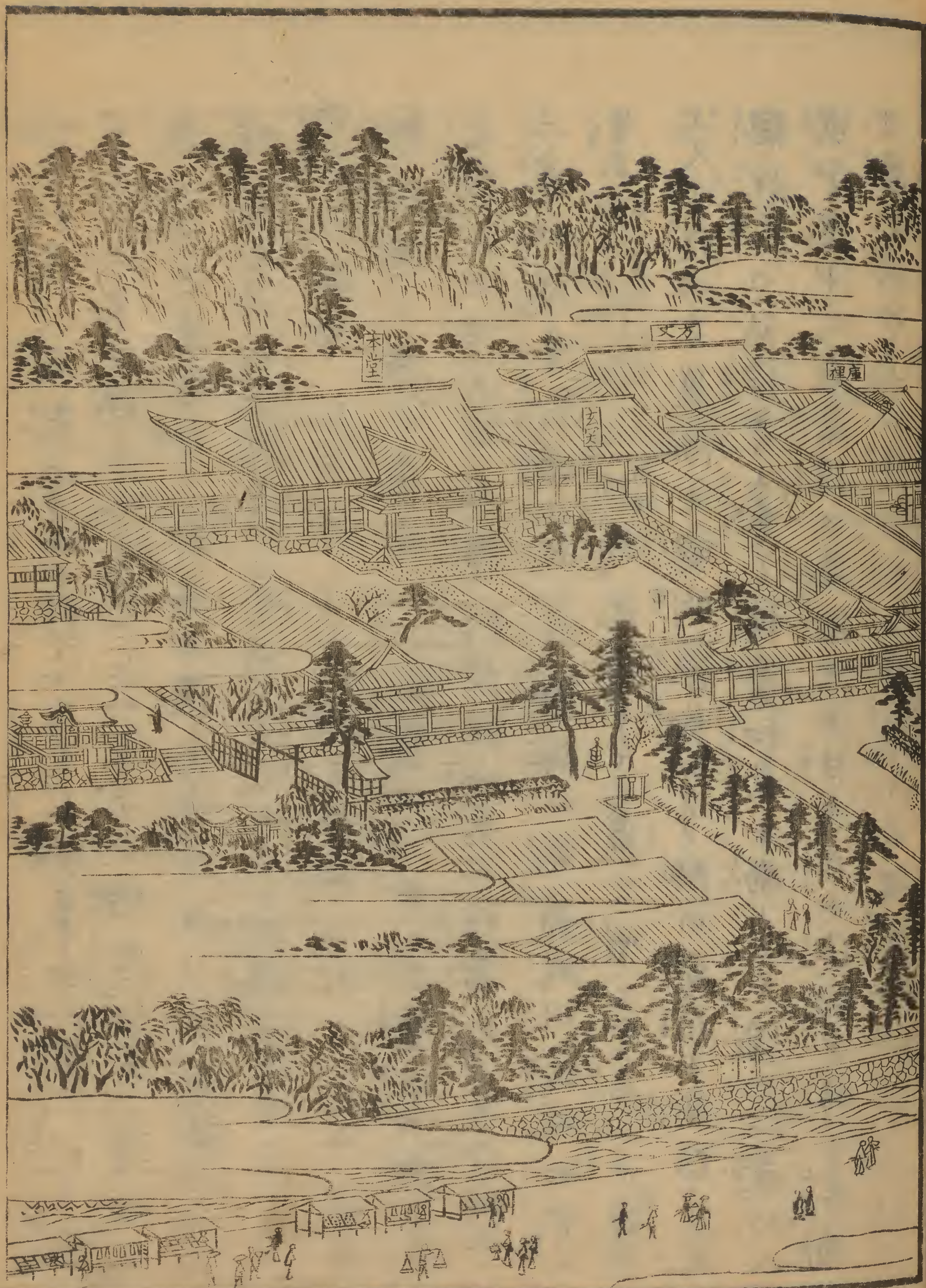
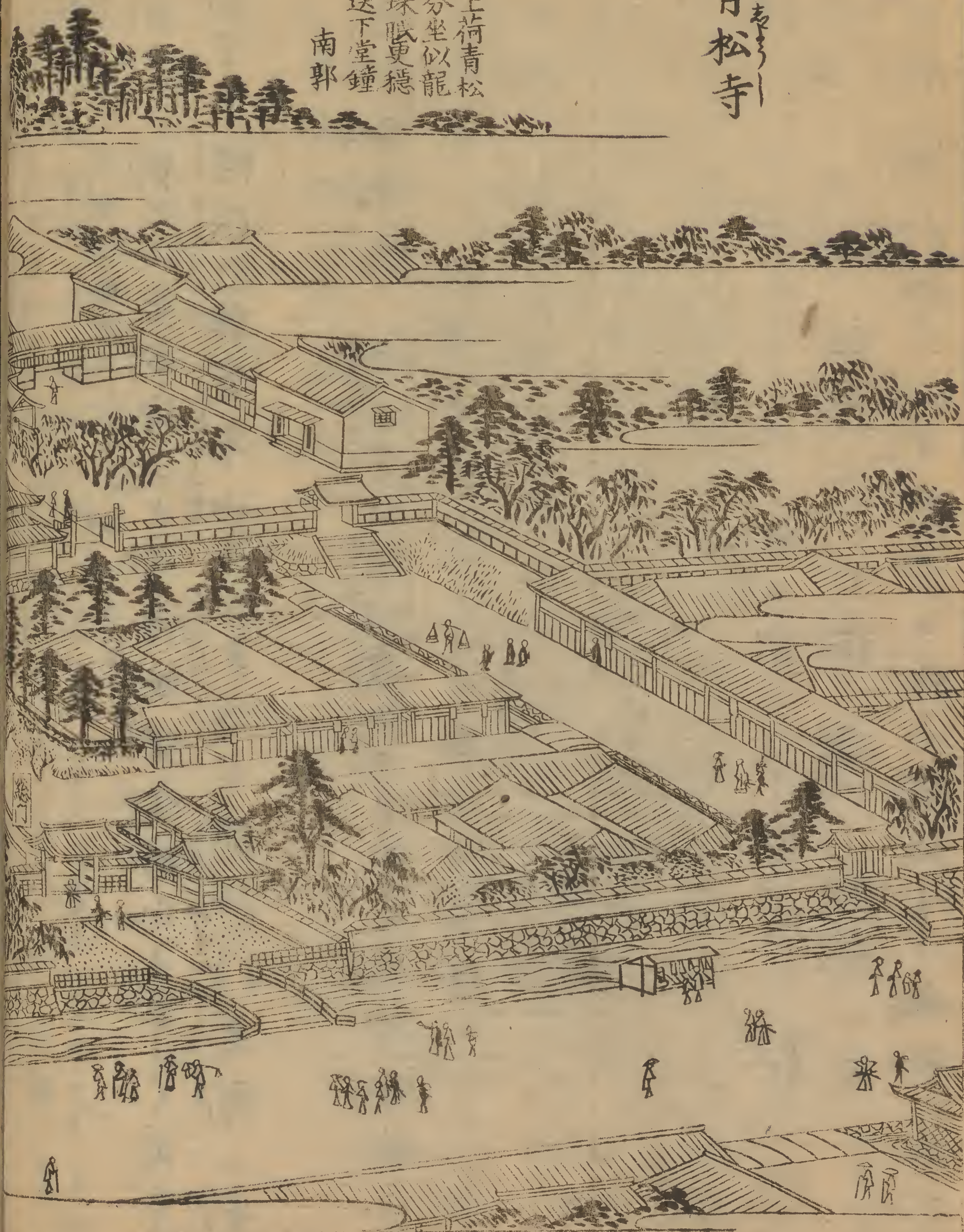
當寺の後の山を含海山と号く眺望愛宕山に等しく美景の地なり惣門の額万年山の三大字ハ闡沙門道霈の筆なり

勝林山金地院 増上寺の西切通の上にあり京師南禅寺の塔頭にして南禅寺に宿寺なり五山の僧録と称す本尊ハ唐佛の聖観世音菩薩なり 或人云宋人陳和卿が作なりといへ 毎月十八日観音懺法修行す 開山ハ大業和尚と云 其頃碩学なりけれバ五山の僧禄司に命せらる 都留の毛衣と云草紙に古ハ寺社裁許の事も加へ玉ひ寺社の訴へを決断せしむゆゑにひろく寛永中より武家の職となる云々 金地院境内に青葉楓と称せる古木ありしが今ハ焼亡ひてなしといへり 此木も昔當寺御城内にありし頃の物なり後此地へ栽るといへり 閻魔王石像ハ塔中二玄庵の前にあり

宝永の頃南部の領主霊亦に依て彼地より麻布の別荘に

青松寺（せいしやうじ）

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭

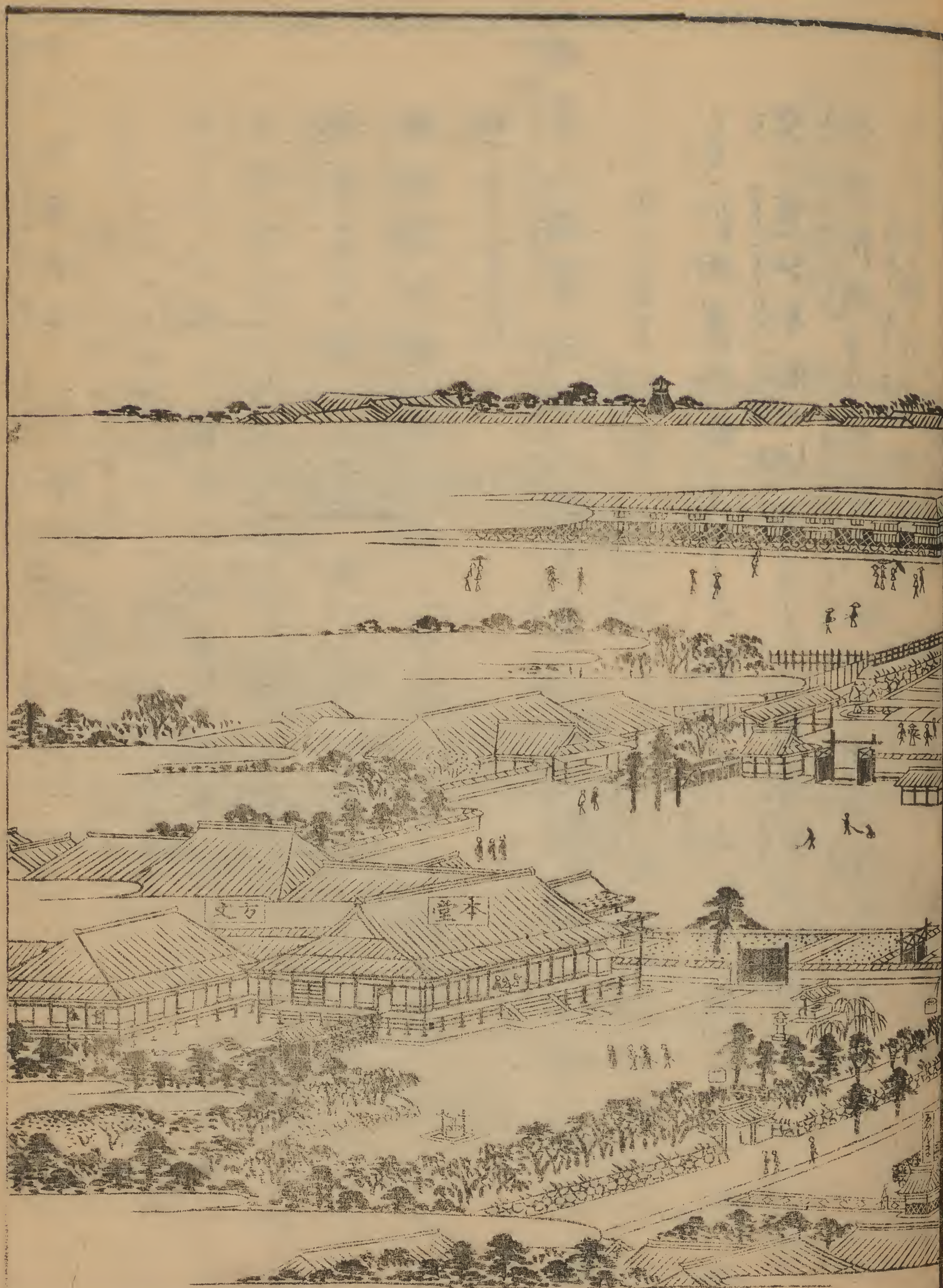
本堂
方丈
庫裡

廷されて再ひ威靈あらたにして又こゝに安せしむ金地院と書せし三大字の額ハ水雲寫とあり又方丈同淳溟筆萬福殿岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の像ハ大の月三月讀ある中の月の十八日にハ開帳あり

光明山天徳寺

智恩院に属す浄家江戸四箇の一にして紫衣の地なり花洛支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑に生る 父ハ藤田左衛門尉道昭と云 母ハ冨永氏或ハ云冨田氏 九歳にして甫て増上寺第七世親誉上人に従ひて雑染を聽明絶倫なり師の遷化に及ひて北總飯沼の弘経寺に至て鎮誉和尚に謁して浄土一乗の大戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉し志猶世塵を厭ひて後古郷に帰りて天智庵 始ハ武州或ハ又地に作る を草創す今の天徳寺是なり 天文二年の草創として先師親誉を以て開山祖とし自ハ二世に居る舊地ハ西丸御城の邊なりしとかや 師ハ遁世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひて洛の知恩院に至て傍に一精舎を建て住ス是を一心院と号 一心院ハ念佛三昧の一本寺なり 昼夜不退に常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製し永世の標準とせり今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩とす 花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院桂の極樂寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創すといへとも不断念仏の道場とす 天文廿三年の秋一心院に寂す實に七月十九日なり化寿四十一と覚えし 今世間用ゆる所の二連数珠も師の製なりとそ中にて是を貫輪といふ佛号を唱ふるの徒此念珠を用ひ

城山

西窪土岐山城侯の藩邸の辺をいふ土俗熊谷次郎直實の城跡といひ傳ふれとも誤なるへし昔熊谷氏の人此処に宅を構へし地なるへし同所神谷町にかゝる石の橋を熊谷橋と号するも故あるへけれと今傳説詳ならず 菊岡沾凉云此所ハ昔麻布殿とりやの出丸の地なりしと云

金地院（こんちゐん）
方丈
本堂

太田道灌城跡 或ハ番神山とも号ス西窪仙石家第宅の地なりといふ 紫の一本にいふ昔ハ太田道灌取立し城地なり 今ハ土取場となりて堀崩せしと云 又昔此地ニ小堂ありしが土佛の釋迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤法華寺の日朗上人持念せる所の墨画の三十番神の画影を携来りて諸人を結縁す然ルニ小田原北条氏後ニ社を建て彼番神を勧請す故ニ番神山といふ 其画像ハ後京師に移すとなり

西窪八幡宮 同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町一丁目にあり 別當ハ天台宗にして東叡山の末八幡山普門院と号ス西窪の鎮守にして旅所ハ小山にあり 相傳ふ当社八幡宮ハ寛弘年間の鎮座なりといへり 慶長五年関原御一戦の時崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書を納らる 別當秀圓御祈祷修行ありし 其奇特ありけれハ

西久保八幡宮

別當

寛永十一年甲戌二月後に宮社御建立ありしとぞ祭礼ハ毎歳八月十五日なり

飯倉 西窪の南を云 此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地にて其御饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へしゆへしか地名に呼るなるべし 永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫飯倉弾正忠太田新六郎島津孫四郎此地を領せしより北条家の所領役帳にみえたり 同書に飯倉の内擲田と あるいハ往古飯倉の地の鬮うちしなるべし 又駒込吉祥寺に蔵する所の北条家人遠山左衛門太夫政景元亀二年江戸あく五十五貫六百八十五文の地を彼寺に寄附ある状に飯倉の地名あり 此中三貫三百文ハ次第よりの箕輪大蔵か寄附せし地なりとあり 猶前の芝神明宮の条下にも神鳳抄東鑑等の書を引援して照合せらるべし

熊野権現宮 飯倉町にあり 或人云養老年間芝の海濱に勧請ありしを遥の後今の地に移さるるとぞ 別当ハ三集山正宮寺といふ天台宗にして東叡山に属せり 毎年六月朔日より三日まで祭礼を修行す

勝手か原 土器町より赤羽へ出る廣小路の辺をいふとぞ 昔ハ三田の方へかけて廣莫の原野なりしかハ太田道灌江戸の城より

飯倉 熊野権現社

勢を出せし時ハ此所かしこく人数を揃られしとなりし

赤羽川 渋谷川の下流なりて新堀と号く 延宝江戸図ニ麻布新堀とあり元禄開板の江戸鹿子といへる艸紙ニ此河のとを赤羽の池と云ありと云 元禄の始鈞命によりて是を堀らしめたまふとなりし 江戸名勝志ニ溝口信濃守伊達美作守の両家これを承られしりとあり

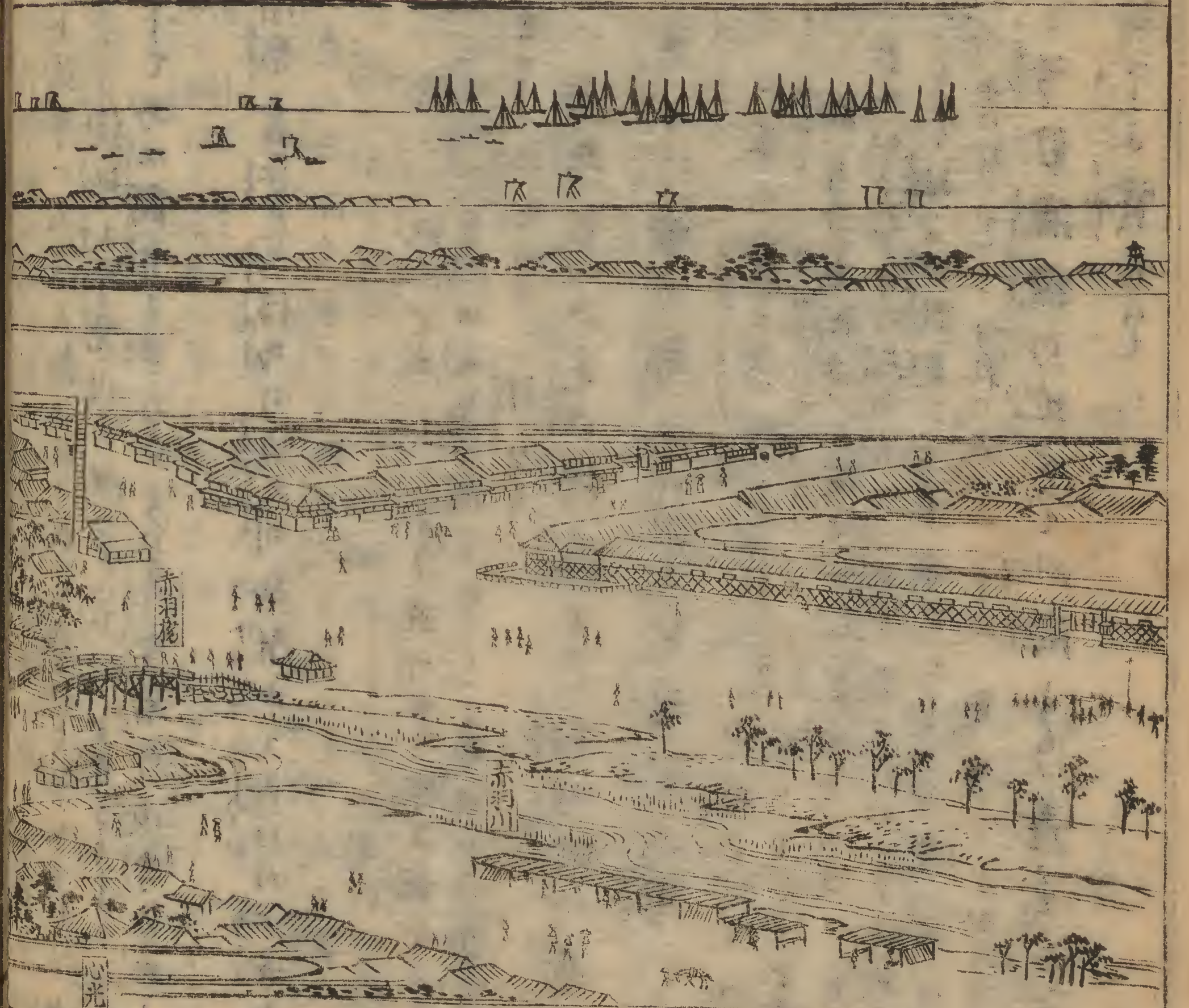
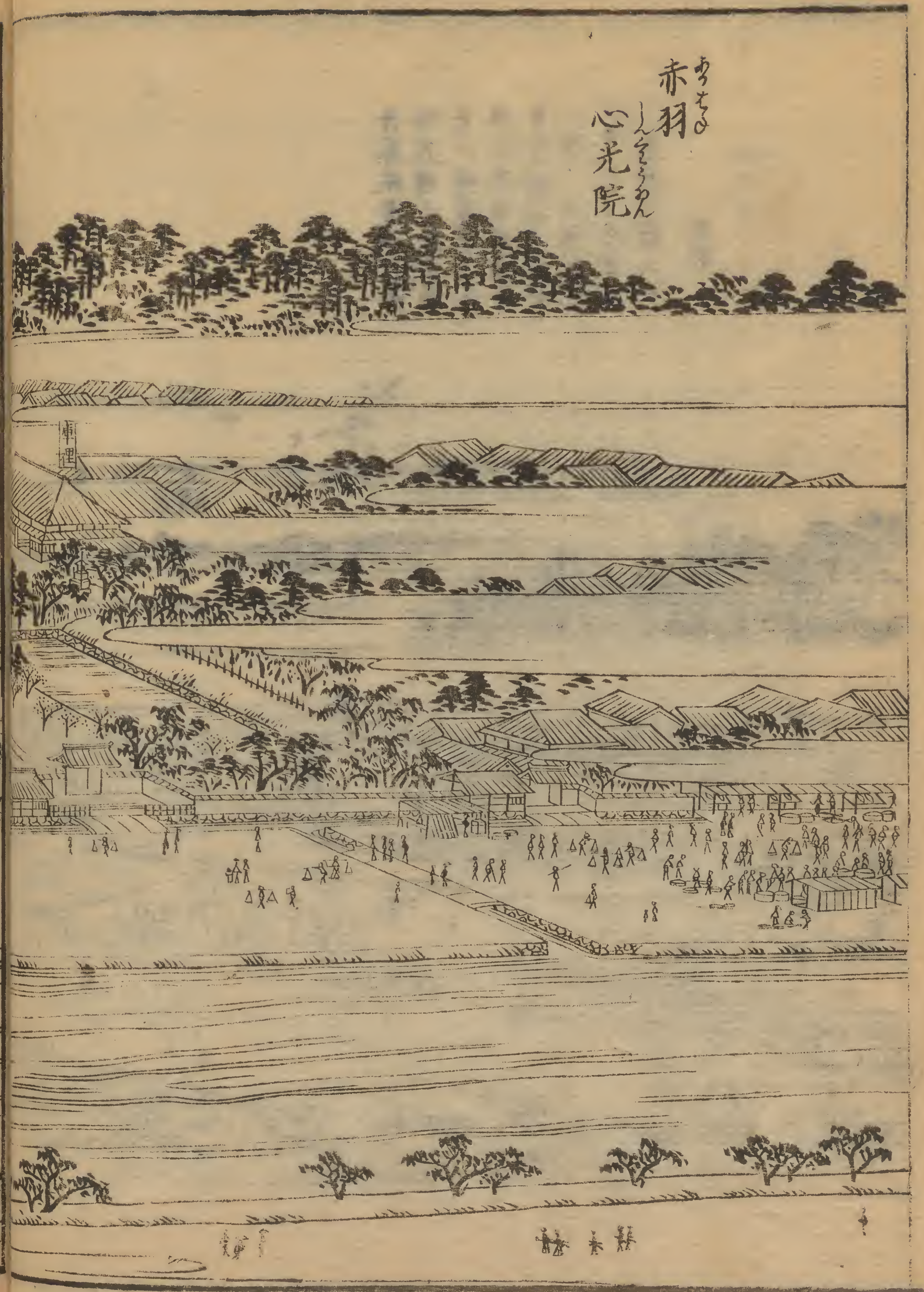
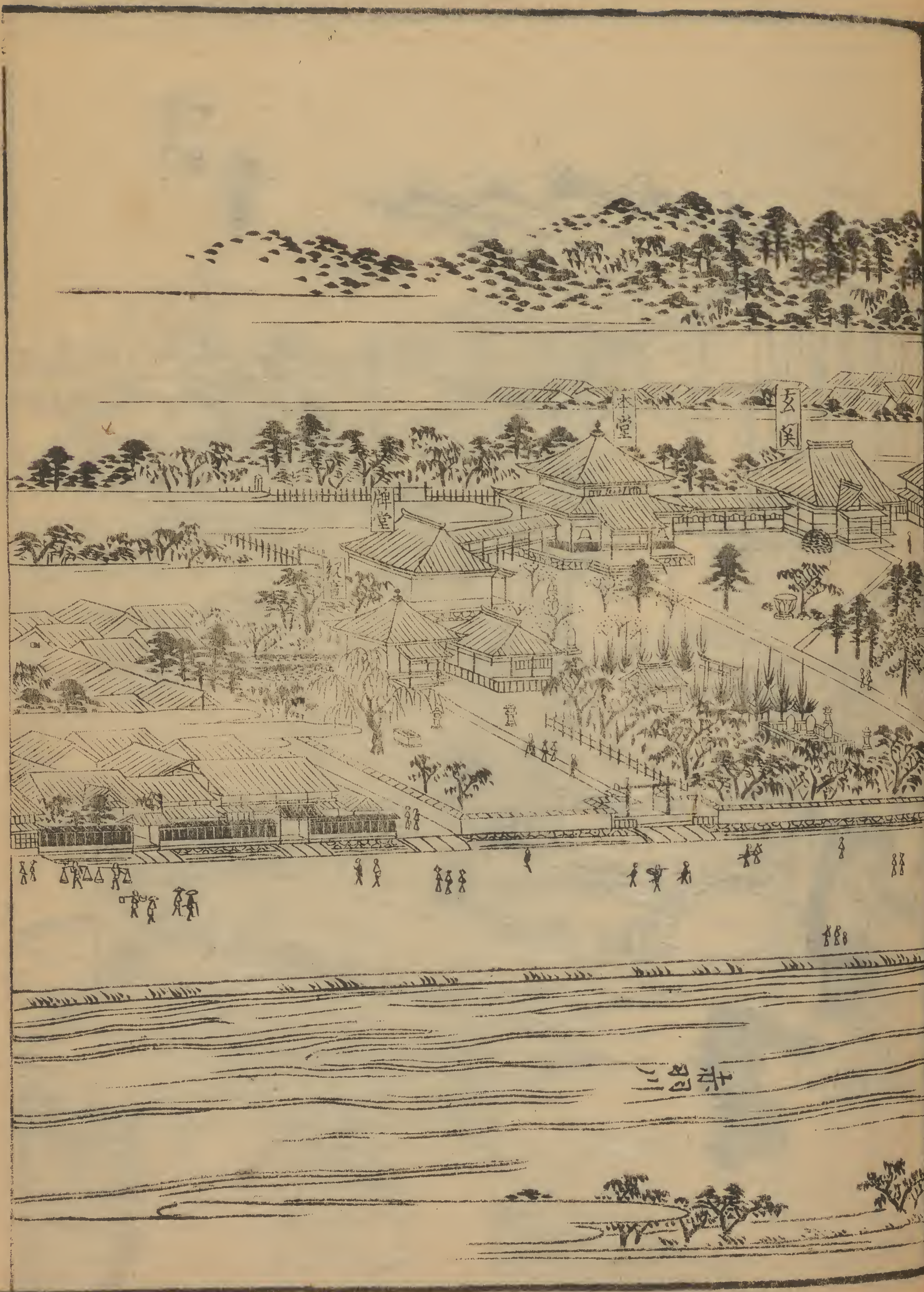
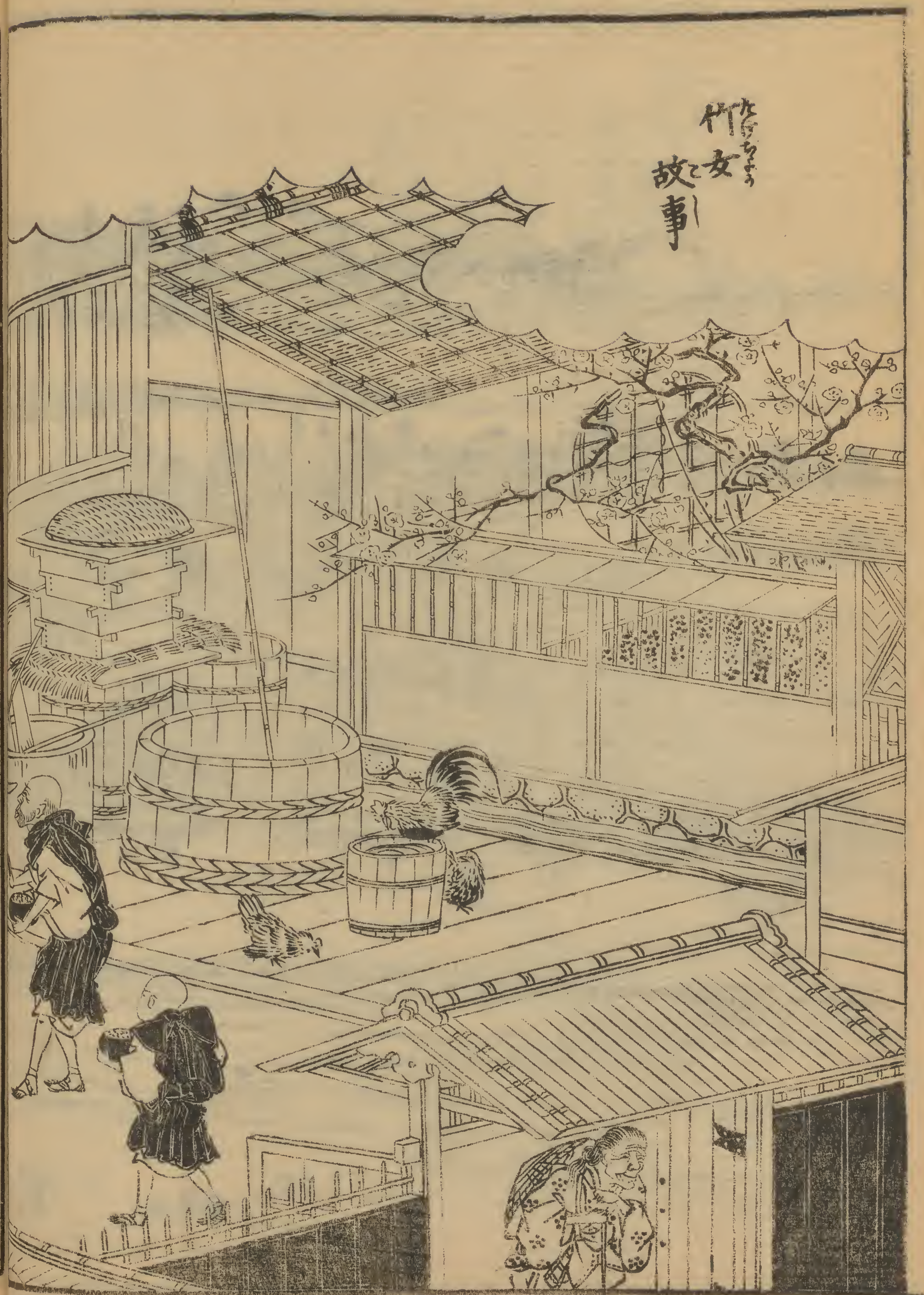
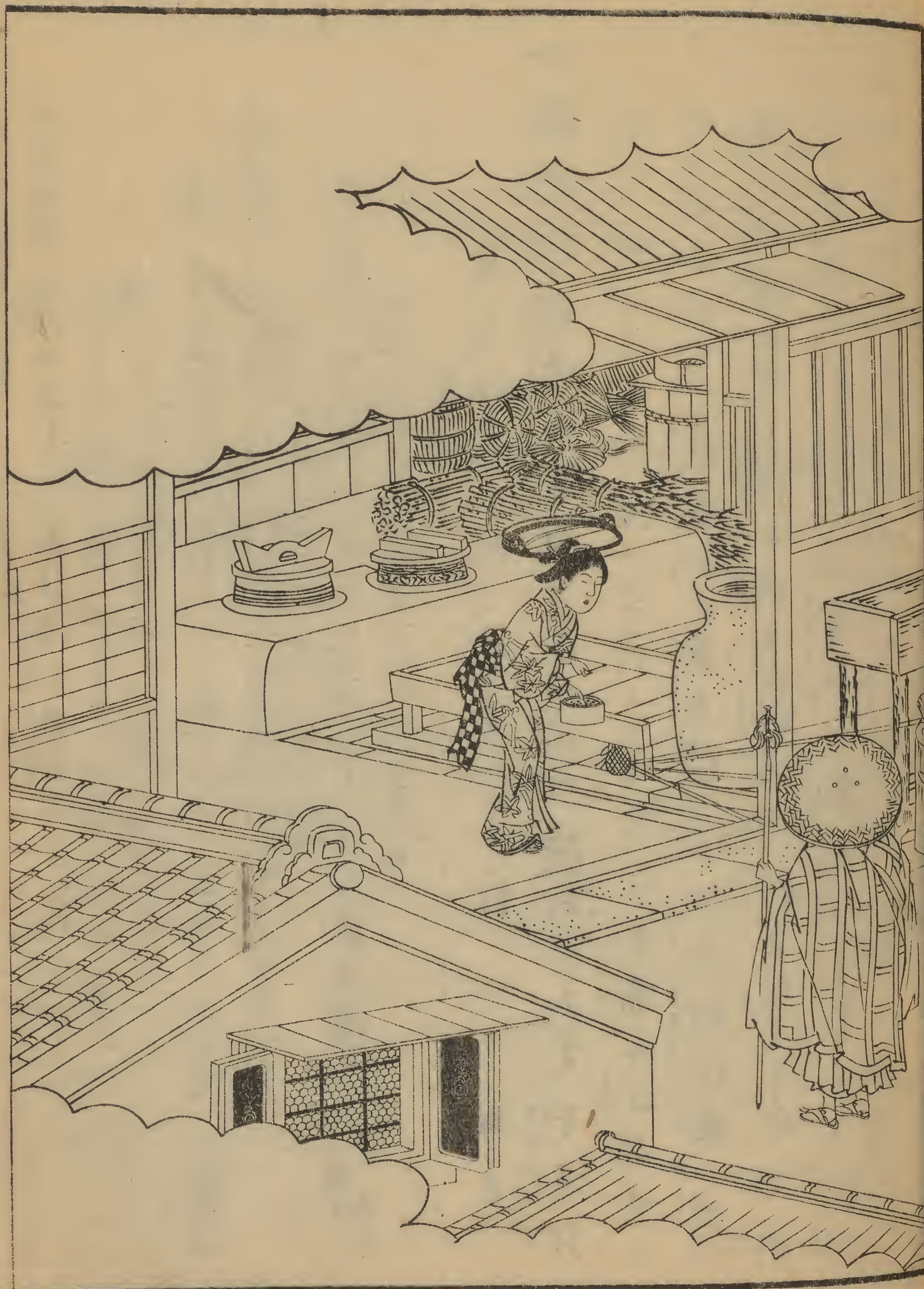
赤羽橋 同し流ニ架を按ニ赤羽ハ赤埴の転したるなるへし欤 此辺茶店多く河原の北かゝて毎朝肴市立て繁昌の地あり

心光院 同所橋より北の河原道より右にありて増上寺の別院にして宝暦の頃縁山より此地ニ移さる 其旧地ハ涅槃門の辺なりと云 寺ハ鎮西上人の古跡なりしく常行念仏の道場なり 恵照律院光阿上人開基なりて 光阿上人ハ横連社継誉心岩頭夢と号し加州小松の人姓ハ加波氏越前浄光院の随流ニ投して新派流頭ニ嗣法せ宝永三年乙卯八月晦日当寺ニ於て寂す 綜図かりて加州大日寺及ひ当寺并恵照院等の開基し不断念仏の道場を創む

引観世音菩薩 境内ニ安せ本尊ハ馬頭観音なりく増上寺の[illegible] 代くさ奉持せるといへり 慶長の頃丹羽五郎左衛門[illegible] 長重奥州二本松ニ在国の時ある日城下ニ出て[illegible] 熊野道者の馬ニ乗[illegible] 道着と唱ふ俗に 大将軍家へ献せ駈を追せのふ不布一端を後輪の鞍手両方にむすひ附るの布彼布一文字に靡る故に改て布引と命せられて愛し給ひしか彼馬斃るの後増上寺境内に埋めて石塔を建られしか其後又件の石塔を本尊として馬頭観音に崇めるとなり宝暦の頃寺と共に此地へ引れけりしといへり

竹女水盤 新著聞集に云江戸大伝馬町佐久間勘解由か召仕の下女たけハ天性仁慈の志深く朝夕の飯米己か分ハ乞丐人に施し其身ハ水盤の角に網を置て洗ひ流しの飯とうけ其溜りしものを自らの食料とせ常に称名怠る事なく終に大往生を遂しとなり彼竹女か常に網をかけて置し水盤ハ今増上寺念仏堂心光院の門の天井に掛てありとそ件の水盤より光明を放ちけるとなん当寺の縁起の中に詳なり

芝浦 本芝町の東の海浜をいふ芝口新橋より南田町の辺迄を惣名なりて上古ハ芝を竹柴の郷といひしを後世上略して柴とのミ呼来りて又文字も芝に書改めけりとそ 更級日記に竹柴の郷といふ事を挙たり 按に三田済海寺の条下に詳なり 南向亭云芝といふハ彼地の古老の説に海苔をとる為に近き所に柴を建海苔のかゝるをとるに木の小枝を柴といへり地名によれりといふ しかるに後芝と改作ると云く按に此説是なりとす 海苔をとるに浅草の辺の[illegible] 今のことく品川の辺にハなかりしなれハ古へハ[illegible]
此地を雑魚場と号け漁猟の地にして此海より産するを芝肴と称して都下に賞せり

赤羽（あかばね）
丹鳳城南赤羽濱
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡擕家蓋白髮
人間卜地避紅塵
少年車馬休相汚
沐罷聊裁頭上巾
南郭
芝浦
増上寺
山内
赤羽橋
赤羽川
心光院

赤羽（あかはね）心光院（しんくわうゐん）
本堂
玄関
禅堂
庫裡

竹女故事

平安記行　文明十あまり二年の頃水無月のはしめつかた土さへさくさけくとか旅人の心しおりのせし避暑の床をわすれて都にまうのほりねか中畧芝といふ所を過るとて

露しけき道の芝生を踏ちらし駒に任するあきくれの空　太田道灌

回國雜記　芝の浦といへる所にいたりけれハ塩屋のけふりうちなひきて物淋しきに塩木をつむ舟ともを見て

やくねより藻汐の煙名にそ立舟にこりつむ芝の浦人　道興准后

此浦を過てあら井といへる所にて云々

江戸にて

芝といふものゝ候夏さしき　梅翁

御穂神社　同所本芝通りより西の横町にあり本芝産土神にして祭禮ハ三月十五日なり別當を正福寺と号す天台宗にて東叡山に属す傳へ云往古駿河國三穂の海人此浦に来り住む故に古郷の御神なれとて文明十一年庚子のとしこゝに當社を勧請せしとそ　祭神御穂津彦御穂津媛の二神なりといへり　土俗當社を鹽竈の

御穂神社
鹿嶋神社

三穂社

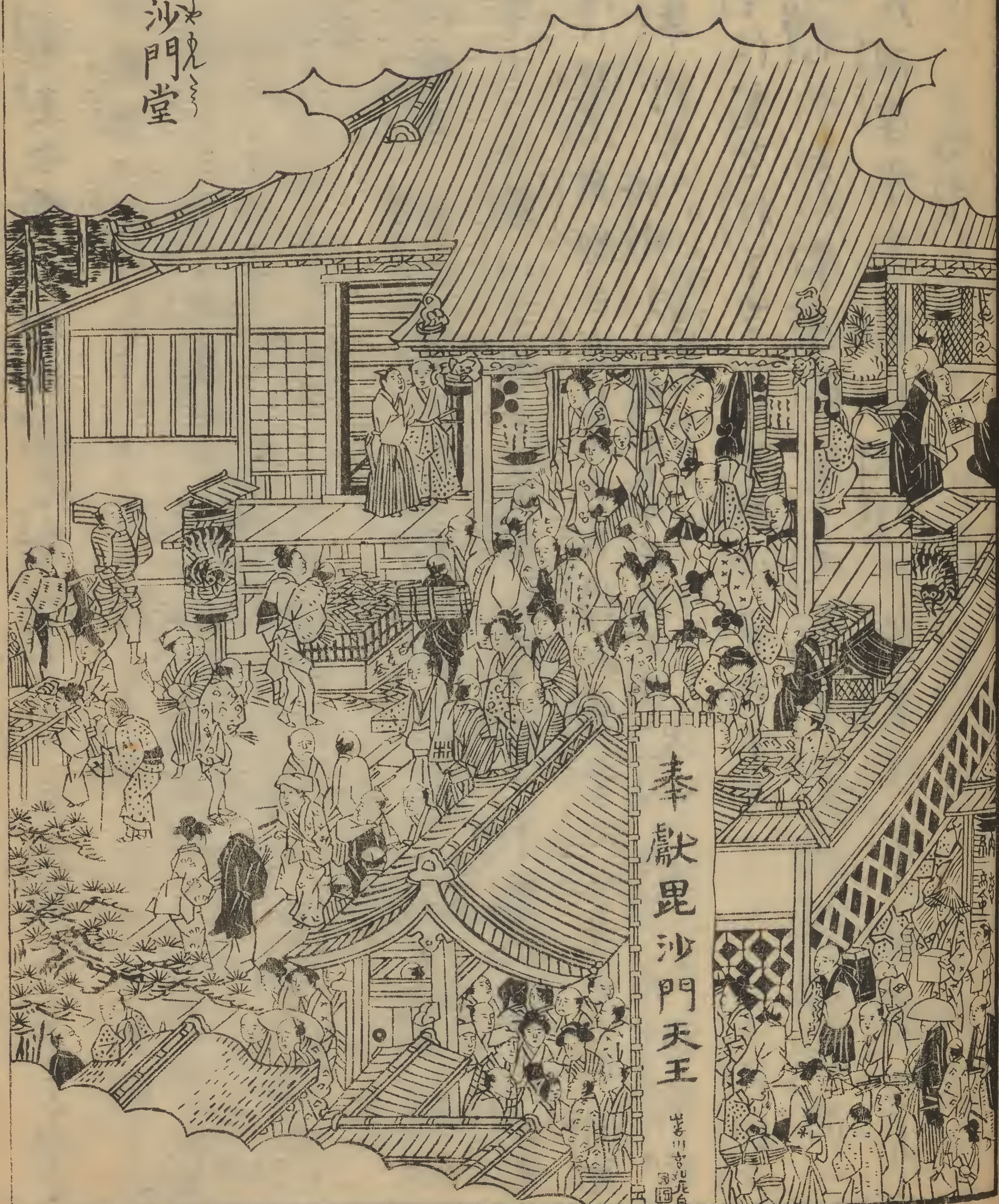
鹿島社

守護神とし祈願まゐるもの多し

鹿島神社

同所海濱にありて別當ハ御穂神社に相同し祭禮も又同しく三月十五日なり　土人傳へ云寛永年間此浦に一の小祠漂流して汀に止るあり漁人これを揚て其本所を尋るに常州鹿島大神宮の社地より小祠なかりしよし又其頃十一面觀音の木像同し海汀に流よりきしかハ鹿島明神も十一面觀音をもて本地佛とせしなれハ是にもとつきて當社の御神を勸請せしとなり

毘沙門堂

金杉の通り東の方の横小路にあり　松林山正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境にあり本尊ハ傳教大師の作にして後日親上人再ひ點眼供養ありしとぞ往古ハ攝州梶折邑一乗寺といへる寺にありしとも僻地にして結縁の人少し

一乗寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりしを日親上人の弘教に歸して

依て寛文の頃衆生化益の為日榮上人こゝに移し奉るとかや靈驗感應の著しき事ハ寺記に詳なり故に參詣の貴賤日〻に多く寅日を殊に群集せり 正月初の寅日參詣の人大方ハ芝の神明宮の門前にて燧石をもとめて帰る輩あり洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣る輩燧石を買て家土産とし是を翁すしとなすこれに準ふといへり

日親堂 日親上人の像を安せし靈驗著しといへり

田中山西應寺 金杉の通りより西の裏にあり 門前を西應寺町と唱ふ 淨土宗にして三縁山に屬す支院三宇あり本尊阿弥陀如来の像ハ慧心僧都の作なりと云傳ふ應安紀元戊申の年明賢上人草創す 明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘十日に遷化す年八十六歳といへり 天正の頃大将軍家當寺に駕を枉させられ寺領御寄附ありしかハ学徒朝夕の助寛にして学道盛なり又當寺十六世存問和尚一宗に碩学にして當時法門の龍象学道の麟鶴なりしかハ大将軍家深く崇敬ましくけるとなり台命に依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧に宗風の法意を示をすゝめ念佛三昧他力往生のをしへ日〻に大ひに弘まり

三田 或ハ御田及ひ箕多に作ると 古神領にて寄られし地を御田と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云

武藏國風土記残篇云 荏原郡御田郷或箕多

公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹藏□

等亦有諸衛允大膳或木工寮云云

按に此地を以渡辺の綱か旧跡とするハ誤なるへし或人云此地ハ三田家の旧領にして三田氏累世こゝに居住す三田家譜に三田三河守其子駿河守綱勝武州三田に住せり依て後人渡辺の綱と混して交へて誤まる歟と云〻渡辺系図に云源次充武藏國足立郡箕田郷に配せられしとあり三田ともあるのなれハ三田箕田同訓なるか故に混雑して附會の説とはなりけらし鶯峯文集に箕田園の記と号するものありて此地を渡辺綱か旧跡とせしるハ其文ハこゝに略せり永禄二年小田原北条家の所領役帳に大田新六郎知行の内に三田内壽楽寺分同箕輪寺屋分又島津弥七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門知行三田高福寺分本住坊寺領にて同所にて惣領分の地等を配すと見えたり

綱坂 同所松平隠岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮

本社

下る坂を号く（惣鹿子に渡辺坂とあり菊岡沾凉云此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと）又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱か手引坂と号く綱か産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱か駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあり

按に窪三田に綱生山当光寺といへる一向派の寺あり渡辺の綱か出生の地なりといひ伝へ又三田八幡宮の神躰をも渡辺の綱か守護神なりとしまへく此辺綱に縁あるもの多し会津家の別荘にも綱か塚と称するものありて塚上の松を懐古松と号けられしを鶯谷先生の箕田園の記を作る其略に云く武蔵国荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱か陳跡なり綱老て致仕を乞ひし此所に終るもの也しより已来数百の星霜を歴といへとも其塚独存し塚上に松を栽て遺跡を標す則是荘気のまさに散ぜん千歳の余情あることの明暦四戊戌の夏会津源公此地を賜ひ別荘とし玉ふ独其塚を存ますハ蓋其の勇を取り古の士を尚ぶとなと云々かくの如く記されしを此地ハ箕田にあらざれば前の三田の条下に詳なり照合せらるへし

小山神明宮　同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨宝童子別当ハ天台宗不動院と号く此所を飯倉神明宮の旧地とするハ誤なり

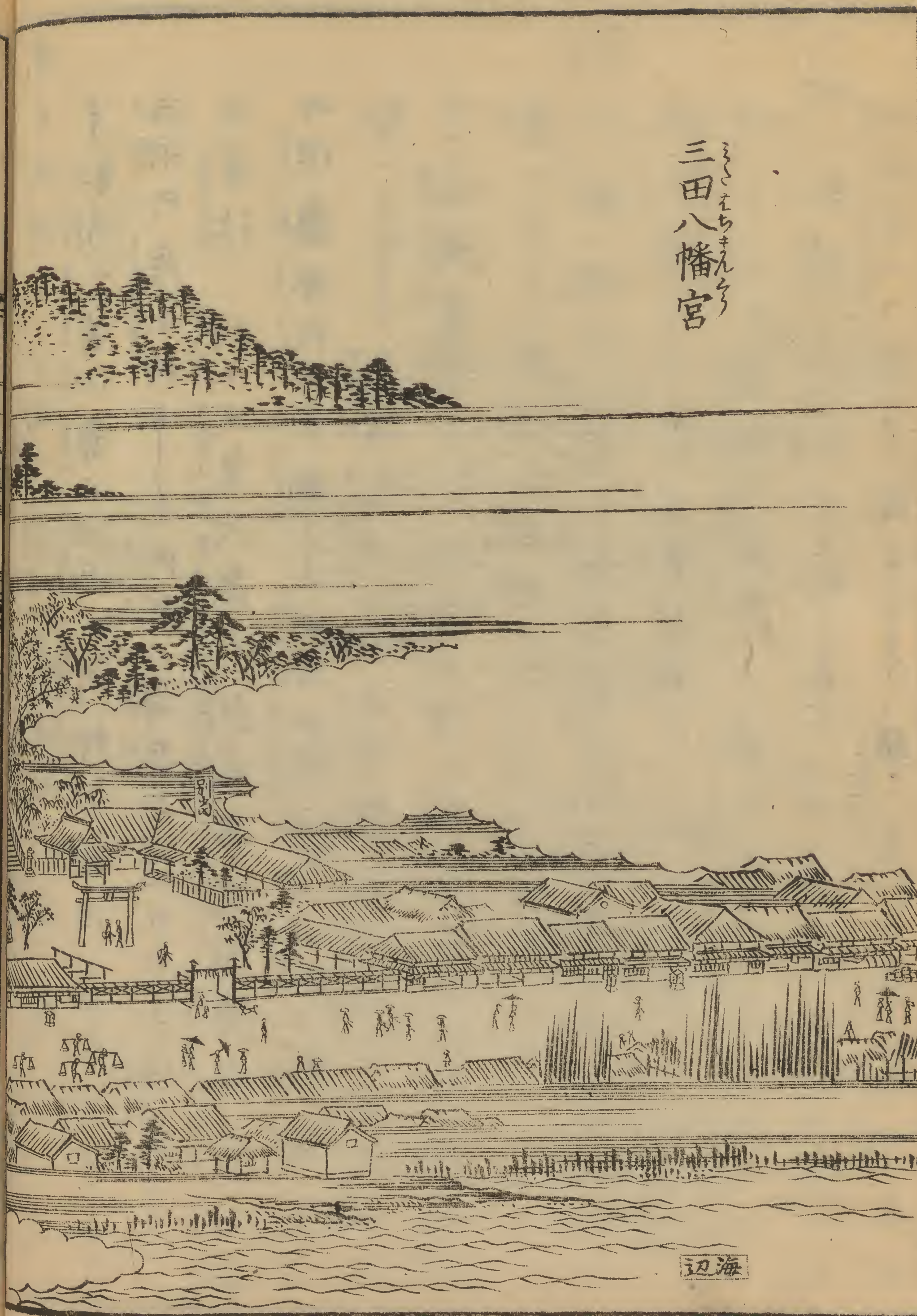
三田
春日明神社

春日明神社　三田一丁目にあり　別當を三笠山神宮寺と号す　和州三笠山春日四所の御神を鎮座なし奉ると終三田の産土神にして例祭ハ毎年九月九日に修行を傳へ云　當社ハ村上天皇天德年間武蔵國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なるが故に此御神を此地に勧請せしむるとかや　其後文明の頃法印慶賢中興す　本地佛ハ十一面観世音にして弘法大師の彫造なりとも又慶賢瑞夢によりて感得の霊佛なりともいひ傳ふ

月波樓　同所松平主殿矦別荘の看樓の号なり　此地ハ眺望實に洞庭の風景を縮するがごとく岳陽の大観を摸に似たるも依て城南の勝地とす　羅山先生の東明集に詳之

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり　三田の惣鎮守にして祭ル所山城男山八幡宮と同じ　後一条帝寛仁年間草創

三田八幡宮
海辺

聖坂（ひじりざか） 済海寺（さいかいじ） 功運寺（こううんじ）

もとゐひ傳ふ旧地ハ窪三田にあり土人云當社ハ延喜式の神名記及び武蔵風土記等の書に載る所の稗田神社是なり今も其旧地に一社あり窪三田八幡宮と称す正保年間今の地へ移しまつるといへり此地後ハ山林にして前ハ東海に臨む故に風光秀美なり別當ハ天台宗にして眺海山無量院と号く祭禮ハ隔年八月十五日に修行を放生會なり

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷

薭田八幡

武蔵國風土記残篇云　荏原郡御田郷稗田八幡

圭田五十八東三字田

所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺

同所聖坂にあり聖坂とハむかし此地に高野聖多く住して開きたりし坂なれハかく云とぞ曹洞派の禪窟にして三州龍門寺に属せり開山を黙室天周和尚といふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地にして所化寮あり當寺境内に綱塚と称するものあり綱の事ハ前の三田及び綱坂の条下に詳なり

周光山濟海寺

聖坂の上道より左側にあり浄土宗にして京師智恩院に属せり上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真言の古刹なりしか中古荒廢に逮ぶ依て法誉上人念無和尚中興せしとぞその庭海岸に臨む沖より目當の燈籠あり當寺庭中の眺望ハ實に絶景なり房總の群山眼下にありて雅趣もつとも深し朝夕に漂ふ釣舟ハ沖にちいさく暮て數點の漁火波を焼かと疑ふる羣芳發して緑陰深く風露爽にして氷霜潔し四時に觀をあらたむ風人の眼を凝しむる一勝地なり月の岬といふも此辺の惣名なり

竹柴寺舊址

濟海寺と同隣の土岐侯の邸中の地其舊跡なりといひ傳ふ山岡明阿云按に今の地ハ海辺ちかくあるを岡の上なれハ更級日記にいへる所にかなへりされと若いふく此寺ちかくあらハ昔ハ外にありし後にこの所へうつせしなるへしと云々

更級日記云　今ハ武蔵國になりぬ殊にをかしき所も見えず濱も砂子

白く波もなくこひぢの様にて紫生と聞野も蘆荻のみ
高く生て馬に乗て弓もたる末見えぬまで高く生茂りて
中を分行に竹芝といふ寺あり遥にはゝさうなどいふ
所は楼の跡礎などありいかなる所ぞと問ハ是ハいにしへ
竹芝といふさかなり國の人ありけるを火焼家の火
焼衛士にさし奉りたりけるに御前の庭を掃とて
などや苦しきめをみるらん我國に七つ三つ造り
居たる酒壺にさし渡したるひたえの瓢の南風吹ハ
北に靡き北風吹ハ南になびき西吹ハ東に靡き東
吹ハ西になびくを見でかくてあるよと獨ごちつぶやき
けるを其時の帝の御むすめいみじうかしづかれ
給ふ只獨り御簾の際に立出給ひて柱に寄かゝ
りて御覧ずるにこのをのこかく獨ごちけるを

哀にいかなる瓢のいかに靡なるらんといみじう床しく
おぼされければ御簾を押明てあのをのこ近寄れと
めしければかしこまりて高欄のつらに参りたりければ
云つる事今一度我にいひて聞せよと仰られければ
酒壺の事今一度申ければ我ゐていきて見せよ
さいふやうありと仰られければかしこく恐しと思ひ
けれどさるべきにやありけんおひ奉りて下るに
便なく人追來らんと思ひて其夜勢多の橋のもと
に此宮を居ゑ奉りて瀬田の橋をひとまを
こほちて夫を飛越て此宮をかきおひ奉りて七日
七夜といふに武蔵國に行着にけり。帝后御子
うせ給ひぬとおぼしまどひもとめ給ふにむさしの
國の衛士のをのこなんいと香ばしき物を首に

竹柴寺古事

引かけて飛様に逃けると申出て此をのこを尋るになかりけるも論なく本の國にこそ行らめと公より使下りて追ふに勢田の橋こぼたれて得行やらず三月といふに武藏の國にいきつきて此をのこを尋るに此御子公使をめして我さるべきにやありけん此男の家ゆかしくてゐて行といひしかバゐて來ましにいみじくこゝありよく覺ゆこの男罪しれうぜられバ我もいかであれと是も前世に此國に跡をたるべきすくせこそありけめはや歸りて公に此よしを奏せよと仰られけれバいはんかたなくてのぼりて御門にかくなんありつると奏しけれバ云かひなし其男を罪しても今ハ此宮をとりかへし都にかへし奉るべきにもあらず竹柴のをのこにいけらん世の限り武藏の國を預けとらせて公事もなさせじたゞ宮に其國あづけ奉らせ賜ふよし宣旨下りければ此家を内裡のごとく造りて住せまゐらせける家を宮なども うせたまひにければ寺になしけるを竹柴寺といふなりとぞ

亀塚

濟海寺の北に隣れる隱岐家の別莊の地にあり 昔ハ竹柴寺の境内なりしを御開國の頃地を割て隱岐家の別莊となりしに此時亀塚ハ隱岐家の邸の内に入りしとぞ其塚のうへに其主の建られたる亀塚の碑と称するものあり 相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地に酒壺ありし其ところに一つの靈亀棲り後土人崇めて神に祀りしが いつの頃にやありけん或時夜ごと〳〵風雨ありて其翌日彼酒壺一堆の石に化せりと云 又文明中大田道灌此地に斥候を置其亀の靈あるをきゝて之を河圖と号くとぞいへり 濟海寺の山号を昔ハ亀塚山と唱へしとぞ今も猶土人ハ亀塚の濟海寺とよびなせり

祖徠先生墓

三田寺町長松寺といへる淨家の境内にあり

魚監観音堂

碑文ハ猗蘭侯撰を

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道
鄒魯博究物理立言修辭德崇名垂不朽莫大焉嗚
呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朕
焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子
識矣享保戊申正月十九日六十有三卒其姓物部茂
卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人
云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新富有暇其
不壽天棄斯人匪天維棄有司列辰嘻我小信暇能
享神盛德不朽永于牖氏

先生ハ荻生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字をもて行ハる一号ハ蘐園通称ハ惣右衛門と云父ハ方庵と号して官医たり先生父に従て南総に住き五歳にして文字を識十五歳よく文を属も家極て貧しく東都に出て力学し業成て柳澤侯の挙にあひ食禄五百石を賜り編修惣裁となる享保十三年戊申正月十九日に卒る著述の書八十餘部といふ

魚籃觀音堂　同所浄閑寺とよべる浄刹に安置す本尊ハ木像にして六寸計なり　面相唐女のごとくにして右の御手に魚籃を携左の御手ハ天衣を持したまへり

縁起曰唐元和年間　憲宗の年号なり　金沙灘といへる地に一人の美婦の籃を持して魚を鬻くあり見る人其容貌の麗しきを競ふ女の云く我性佛経を悦ぶ若是に通せむ人あらハ夫とせんと云其中に馬氏なる人あり是をよくす依此女をむかへけるに程なく死せり馬氏悲に堪ず日を経て後異僧来りて馬氏と共に塚をひらくに霊骨ことごとく金鎖のごとくなりて光を放つ是より其國こぞりて三寶を崇ふとなむ　初金沙灘に應化ましまし妙相をあらためて魚籃觀音とハ号けるとかや　爰に當寺の開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎に遊化の頃一老婦より此霊像を感得し元和三年丁巳豊前國中津といふ地に假に浄舎を営み御座を構へて魚籃院と号す竟に寛永七年庚午三田の地に奉安せしを称誉上人其地の所せまきを歎き承應元年壬辰正に今の地に移し當寺を建立す爾より緇素まうで渇仰し衆人打群て歩を運ぶゆゑも霊應いちじるし香煙常に風に靡き梵唄うたて林り
とぞいふ

潮見坂

潮見坂 聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ 或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼くりしとぞ古ハ此辺に七崎ありしと云按に潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒藺崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を合せて七崎とのふべし

伊皿子薬師堂 潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫王山福昌寺と号す 天台宗城琳寺に属す 本尊薬師佛の像ハ智證大師の作にして右大将頼朝卿の念持佛なりしとぞ往古相州鎌倉の佐介谷にありて薬師堂といふ其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地に移し奉る 今の御殿山の地なり 終に寛永年間今の地に安置すといふ 今鎌倉佐介谷に薬師堂跡と字する地あり其旧跡なるべし

東鑑曰

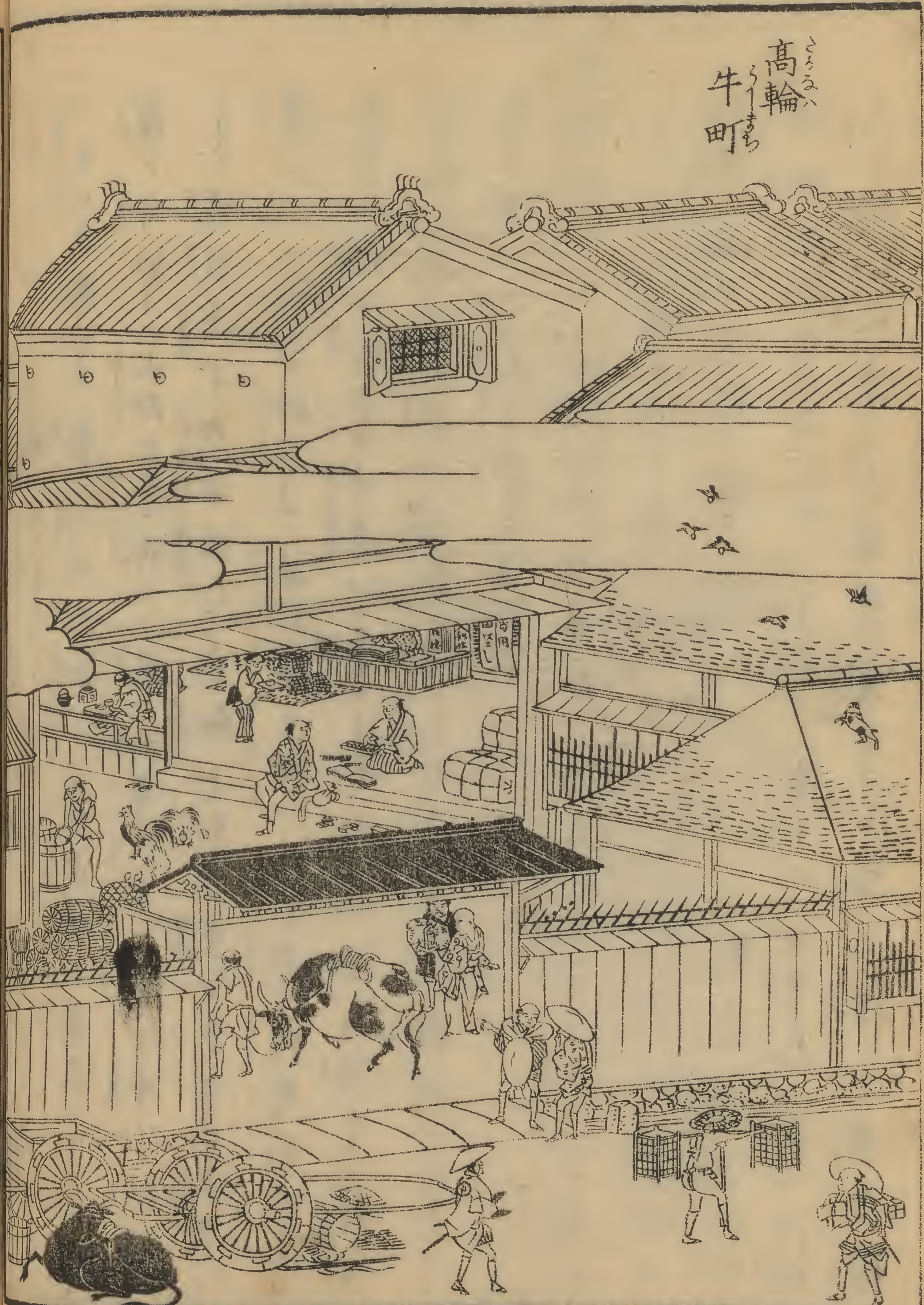
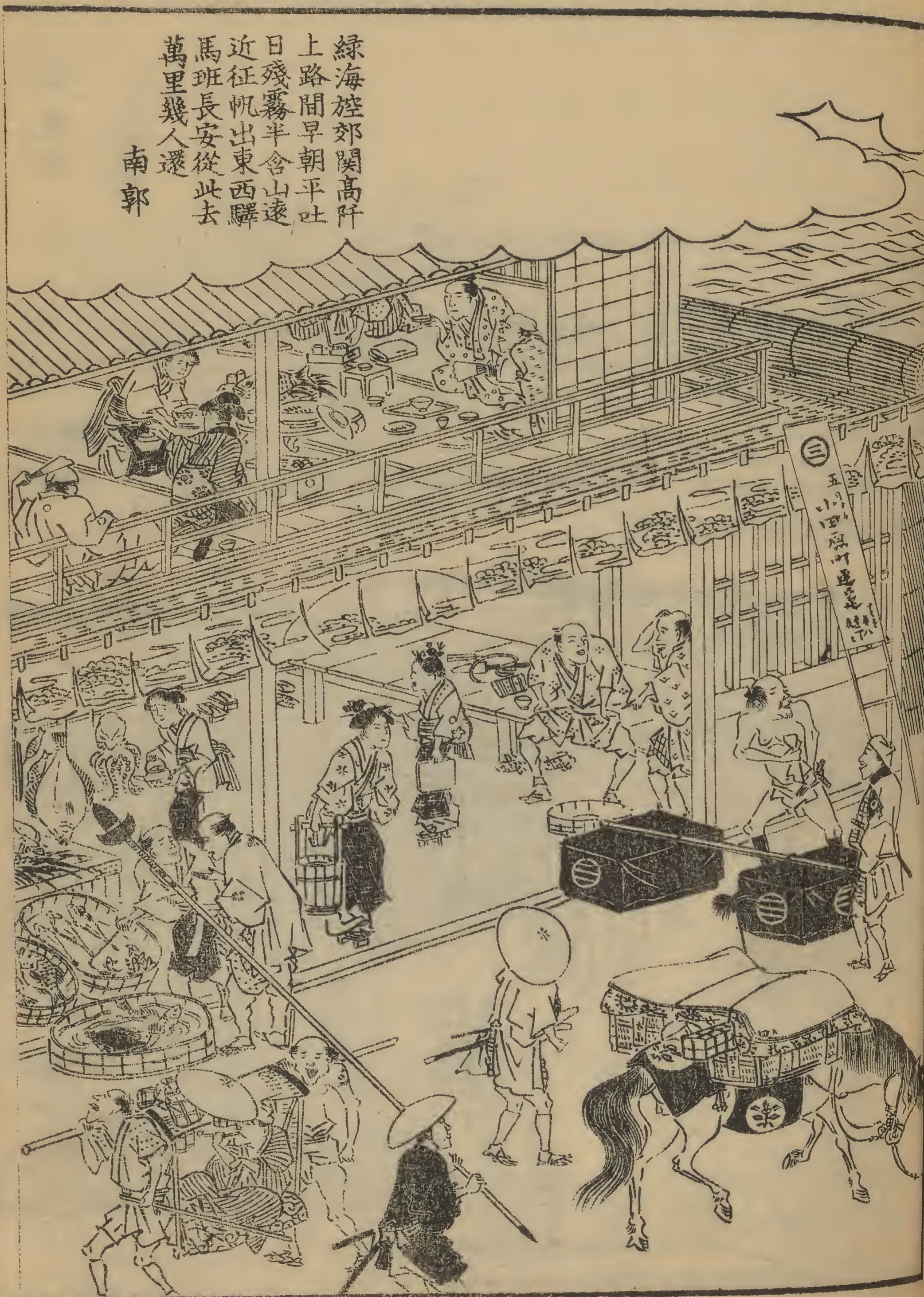
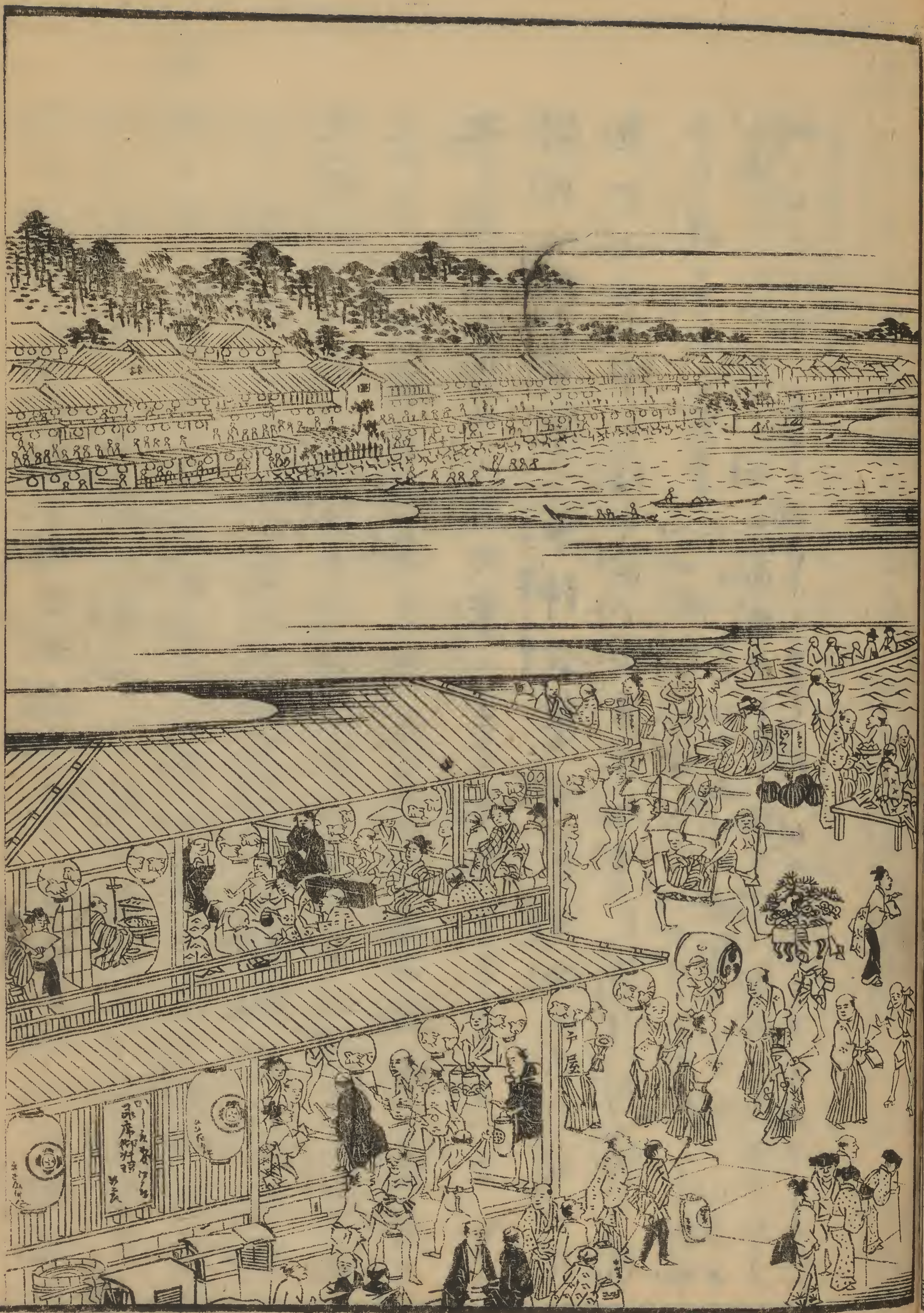
建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所
令草創給之大倉新御堂安置薬師如来像 運慶奉造之
今日被遂供養導師荘厳房律師行勇 咒願圓如房
阿闍梨遍曜 堂達頓覺房良喜 供若宮僧也 施主並室家
等坐簾中

按に東鑑にある此薬師佛を運慶の作とし寺傳智證大師とす又東鑑に右京兆とあるハ北条右京太夫義時のことなるを

伊皿子薬師堂

牛小屋 牛町にあり（延宝江戸図に此地を牛の尻と云とあり）牛を畜ける家多く牛の數一千疋に餘れり養ふ処の牛額小く其角後に靡きたるを藪覆と号けて上品なりと都にて牛ハ行事正しく殊に早し形婉にして精氣撓す力量勝たれバ軛をかけ重を乗せて遠きに運ふ人の用を助くる其功誠に少からず古ハ淀鳥羽にのミありて都の外にて牛車なりしを御入國の頃より許宥ありて江府にも是を用ゆるのとなりぬれども餘ハ駿河にあるのミにて唯此三ヶ所に限れりとぞ

高輪大木戸 宝永七年庚寅新に海道の左右に石垣を築せられ高札場となしたるに（其初ハ同所田町四丁目の三辻にありし高札を今も彼地を元札の辻と唱ふ）此地を江戸の喉口なれバあり（細町より品川迄の間ひしく海岸にあつまる）七軒と云辺ハ酒旗肉肆海亭をまうけたれハ京登りて東下り伊勢参宮等の旅人を餞り迎ふるとて来ぬる輩ここに宴を催し常に繁

高輪牛町

高輪大木戸
緑海控郊関高阡上路間早朝平吐日残霧半含山遠近征帆出東西驛馬班長安從此去萬里幾人還
南郭

高輪海邊
七月二十六夜待

昌の地なりしも後にハ三田の丘綿くとし前にハ品川の海遥に開け渚に寄る浦浪の真砂を洗ひ光景ことに寂興あり

高輪ヶ原 里老云く白金臺及ひ二本榎品川臺大井村抔の辺り迄の惣称なりとぞ異本北條五代記に上杉修理太夫朝興武州江戸の城に居住す大永四年正月十三日小田原北条家より二万餘騎を引卒し朝興を攻んために彼地を發向せ依て稲毛六郷の上杉の家人より早馬をもて急を告る朝興ハ俄の事なれハ軍評定にも及ハず中途に出迎ひて勝負を決すへしと討て出小田原の先陣と品川高輪ヶ原にて渡り合とあれも（小田原記に永禄信玄小田原を攻むとき北条下つハ一手ハ江戸品川の縄嶋の辺を焼て民屋を追捕すとあり又江戸咄に高縄手とあり然る時ハ高縄ハ高縄手なり按に今の海道ハ後世に開けしものなり古ヘハ丘の上通りを通路せしなれハさもありぬへし）

萬松山泉岳寺 海道の右にあり野州冨田の大中寺に属す曹洞宗江戸三箇寺の一員なり（觸頭總泉寺芝青松寺當寺なり）坊舎三宇学寮九宇あり當寺ハ往古慶長年間 台命を奉して門庵宗関和尚外櫻田の地に創建する所にて禅刹なりしも後寛永十八年辛巳再命ありて寺を今の地に移したりとの本尊釈迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文珠普賢なり總門の額萬松山の三大字ハ華僧闇沙門道霈の書にして康熙辛酉孟冬上浣と記せり

當寺ハ浅野家の香花院にして其家累代の兆域あり又浅野内匠頭長矩及ひ義士四十七人の石塔あり方丈より南の丘は半腹にあり傍に當寺住僧建る所の石碑あり其旨趣を注せ二月三月の四日及ひ正月七月の十六日等には英名を追慕して之に集ふ人少からず又當寺に義士等の遺物を収蔵せること多し

泉岳寺（せんがくじ）

浅野家の義士墓をいとむ

松も
ころの
法を
しらす
かき川
ちさ

其角

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を刄傷に及ぶによりて長矩は死を賜ふ後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂に在て君の讐は共に天を戴べからずと云の義によりて血盟を以て同志の者をかたらひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至て義士四十七人義英の所在を捜して其首級を得當寺に至て亡君の墓前に祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せしむ今ハ諸書に詳なるを以てこゝを省く

歸命山如来寺　大日院と號す泉岳寺の南に隣る天台宗にして東叡山に属せり本尊五智如来ハ座像各一丈あまり（俗に芝の大佛と称す）木食但唱師の彫造なり（但唱ハ佛工にしてとよりて佛躰を作るに妙を得たり故に奇妙佛と号せり京都鳴滝の五智山に安置せる所の石像の但唱作る五智如来十三佛等ハ但唱の作にして并に自の像ども作りまらせ攝州有馬郡高須村の産なり彼所に霊滝山興勝寺と云古刹ありしを再興して釈迦如来及ひ自の像をも彫刻し安置せり）其母有馬薬師に祈請して是を設く三歳にして魚肉を食せず九歳初て出家す年十五に至て木食但善の弟子となりて夫より後信州檀特山に篭り百日の中に念佛三昧を修得し一向の峯に三尊の影向を拜す同國浅間嶽及ひ南紀の那智山等に篭る事各百日宛又南海北溟の間を普く回て諸の奇特をあらはす事多し終に江戸に下て寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るといふ（三時念佛の勤ハ但善但唱二代にして絶えり）

臥龍岡　境内堂前北の岡を云形状を以号とせり上に天満宮の祠あるゆゑに天神山とも唱へり

太子堂　同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺にあり聖徳太子の像ハ十六歳の御容にして自作なりといふ（元禄年間閑枝の江戸鹿子といへるものに明暦年間越後守光長卿の陪臣川木八兵衛某故ありて此所に安置しまつると云り）

如来寺
にょらいじ
世に大佛といふ
本堂
方丈
天神
秋葉
大日

稲荷祠　太子堂庚申堂の中に並び立せり高輪の産土神なり

庚申堂　同じ境内にあり本尊ハ青面金剛の木像なり摂州四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作といふ縁起云大宝元年辛丑正月庚申の日八一年の間に六度ありて八専の間日に中まり人間に三尸といふ三の悪蟲ありて災を招く然に庚申を祭る時ハ此蟲退散し身に幸を来らしめ若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝釋天王衆生をあはれミ給ふ故に汝に此法を附属を我ハ則青面金剛なりとぞ又十二の誓願を示しまへり僧都信心肝に命し直に感見しまる所のる容を彫刻し普く衆生に庚申の法を授くとなり

光照山常光寺　同所北町にあり浄土宗にして芝増上寺に属を開山を大誉上人と号ス本尊ハ金像の阿弥陀如来なり世に信州善光寺分身の弥陀如来と称す縁起云此霊像ハ聖徳太子難波の堀江の水面にして尊容を拝しまひその像を鋳さしむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め出陣を然に霊威のありて危難を除き剰へ忠度を討て武名を顕せり依代々其家に傳へしを獨夜と云僧故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ奉る遂に定月和尚件の旨趣を自記しまひ本尊と共に當寺に収られしといふ此故にや當寺境内に岡部六弥太が墓と呼ぶ古き石塔の破壊せるものを存せり

珠玉山宝蔵寺　同所にあり浄土宗にして芝増上寺に属を

太子堂
稲荷社
庚申堂

高輪海辺

常光寺

本堂
方丈

開山ハ順清法印と号す往古ハ慈覚大師開創の梵刹
にして天台宗なりしとぞ其の頃より今の宗風に転
じて七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興す本尊阿弥陀
如来の像ハ善導大師の作にして御手に宝珠を持し給ふ
故に世俗宝珠阿弥陀如来と称す（本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫）
付る
又子安観世音　当寺に安を画像にして　延喜帝の宸筆
なりと云　縁起一巻ありて（画縁起ハ土佐光信と云　和田義盛撰する所といふ　略縁起ハ）
縁起略に云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其
途中一人の婦ありて告て云く此霊像ハ梁武帝末皇
太子まします時常に観音を祈念し給ふ或時此
霊像を感得なし給ひしに程なく太子降誕ましまし
せり昭明太子是なりと　其後此霊像本朝に渡りまし

欽明天皇御崇敬あり又　醍醐天皇も尊信なし給ひ
震翰を注き縁起を作らせたまふところを将軍にさゝぐと
なり頼朝卿これを得たまひ鎌倉に安置しける信淺から
ざるものなり其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添たり
しところなり此霊像鎌倉兵乱の後當寺に遷しまゐらせと
いへり

辨財天　慈覚大師江州竹生島に詣でたまひし頃海中
波間に影現ありし宇賀神の形を摸擬し御長七寸
三分に彫刻なしたまひしを當寺に安置しあるとかなり

石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路
を入て西の方二丁斗にあり祭神詳ならず同所天台宗
安泰寺の持なり昔ハ遮軍神に作られり寄願ある者
成就の後ハ必何によらん樹木を携へ来り社地に栽て

高山稲荷社
薩州侯の藩の南にあり

東禪寺（とうせんじ）
本堂
方丈
開山堂
塔中
塔中
経堂
天神

賽をといふ此地を石神横町と字するハ此社ある故なるべし
土人誤つてせきやうとし横町と唱ふ

佛日山東禪寺 同所高輪中町にあり妙心派の禪宗江戸四箇寺の一なり本尊ハ釋迦如来開山ハ嶺南和尚と号す宝鑑國師と諡す和尚ハ日向國飫肥の人守永氏肥前守祐良の五男なりしが幼より佛門に入り後宗門の大徳となりしが寛永二十年癸未七月廿七日寂す歳六十二是なりし慶長の頃江戸に来りて阿左布に一宇を創く當寺其地を今も靈南坂と云ふ寛永年間今の地に移さる總門ハ海に臨む此門の額海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯の筆なり頗る世に称せり

宝鑑録云敕諡大大法鑑禪師嶺南和尚大心中與主盟東禪開闢始祖得法洛西之地搬轉向上機關盛化海東之邊云云

有喜壽寺 八幡宮 寺外右の方にあり安泰寺奉祀す
此地を有喜壽の森と号く 或人云昔ハ老樹の松一株ありて鵜の群あつまりしかハ鵜樹巣ともかくといへり

谷山 今云所ハ品川の入口にありて海に臨む丘をさしていふ昔ハ大日山と号けるとぞ 紫の一本といへる草帋に昔ハ此地に出崎ありしとも 或ハ諸侯八人の新宅ありし故八家とありとぞ 谷山ハ邑名にして目黒の南より唱ふるといへども証となすべからず袖ヶ崎仙臺侯別莊の地の辺へかけて都て谷山村なるべし此地に限るべき号にあらず 大日山と号せしハ昔此地に石像の大日如来立せ給ひし故ありとぞ後世其堂宇破壊せし頃谷山稲荷の地にうつし又品川北馬場の光嚴寺へ収めると云へと今ハ其石像の所在をしらず

江戸名所圖會天樞下終